

「賢さん、気を付けてくれよ。今回のプロジェクトのリーダーが君だということ社内には公表したから、多分外部にも漏れているだろう。君に敵意を抱く組織や、人物が出てきても可笑しくない。身边には細心の注意を払ってくれよ」

「はい、分かりました。肝に銘じます」

「亜希子がそちらに行っただろう。二人をよろしく頼むぞ」

「はい、分かりました」

賢は藤代肇がどうして自分と祐子が爆発現場にいたことを知っているのか不思議だった。多分、誰かに聞いたのだろうと思った。しかし、そんなことより今回のプロジェクトが戦慄を覚える様な危険な取組内容となる予感がしてきた。理想的な社会の実現を図る努力だけでなく、それと共に暗躍することが予想される陰と闇の部分への対処が重要なようだ。常に意識的でなくてはならないと賢は気を引き締めた。

「あなた、席に着いてください」

祐子が賢を促した。既に祐子と亜希子は席に座っている。賢は席に着きながら命を落とした若いカップルを思った。「自分への攻撃が原因だったのなら本当に申し訳ない」と心から詫びをし冥福を祈った。賢の瞳に涙が光った。

「あなた、どうしたの？」

祐子の声に賢はこのふたりの女性を危険な目に遭わせてはならないと思った。

「いや、何でもない・・・さあ、乾杯しようか。今日はこの後で瞑想をするかも知れないから、お酒は口を濡らす程度にしておこう」

祐子と亜希子は一瞬不安げに顔を見合わせたが、賢の明るい乾杯の声に明るく唱和した。

「祐子、相変わらず料理がうまいな。亜希子は稽古事があるからいろいろ忙しいだろうが、祐子は毎日どうしているんだ？」

「わたしはね、ここ数日孤児院を訪ねているのよ。まあ子供達と遊んでいるって言った方がいいかもしれないけどね。子供はみんな純粋ね。大人達の責任は重いわ。この間スーパーで買い物をして精算の順番待ちで

並んでいたら、3、4歳の男の子が駆けて来てわたしの二つ後ろに並んでいた中年の女性の手押し籠にぶつかって「痛いっ！」って叫んで倒れたのよ。それを見てその中年の女性が「あんた、お店の中を走っちゃ駄目じゃないの」って言ったのよ。そしたら男の子がその女性を睨み付けて「おばさん、顔が汚いよ」って言い返したの。その中年の女性は顔が真っ赤になって黙ってしまったわ。そしたら、その女性とわたしの間にいた同じような中年の一寸小太りの女性が「全く、近頃の子供は躰が出来てないわね」って言って、顔を赤くしている女性の方を見たの。でも女性は返す言葉を失って何も応答しなかったわ。わたし、男の子を立ち上がらせて「怪我はしなかった？」って聞いたら、「だいじょうぶだ」って言ってどこかに走って行ったわ。顔を赤くした女性はわたしの方を怪訝な顔で見っていたわ。直ぐ精算の番になってしまったからその後のことは分からないけど」

「大人は子供に教える前に自分自身を正さなくちゃ駄目だな」

「お姉様、わたくしもそう思います。わたくしもいつも反省しています」

「亜希子さんは大丈夫よ、そのまま子供と同じ様に純粹なもの」

「お姉様の明るさと優しさは格別ですわ。わたくしなど足元にも及びませんわ」

ふたりは褒め合って少し顔を赤らめて笑った。賢は確かにそうだと思う。食事が済んで亜希子と祐子が片付けを済ませてから、3人はソファーに移動して寛いだ。

「さて、あなた、早瀬由美さんのお話を聞かせてくださらない？」

「うん、さっき祐子に話した内容と重複するけど我慢しろよ」

「勿論よ、亜希子さんは初めて聞くんだから」

賢は早瀬由美の過去世の話をした。二人の女性は真偽を問わなかったが、話に出てくる賢の過去世のイメージが現在の賢の姿に重なった。二人とも早瀬由美の過去世の話は本当のことかも知れないと思った。

「ところで失踪状態にあるときのことだが、どうやらその状態は思考を止めた瞑想状態と似ているんじゃないかと思うんだ。自分自身に戻っている状態じゃないかと。と言うのはこの現実を、意識を覚醒させて生き

てみると時間経過は感じなくなってしまうんじゃないかと思うんだ。自分の意識が全てを創造できる状態にあるんじゃないかと。俺と亜希子が失踪した時は、特に特別の意志を持って失踪した訳ではなかっただろう。だから時間も形も無い状態の中にいたんだと思う。その状態は瞑想時の意識の状態と同じで、失踪状態というのは丁度そんな状態じゃないかと思うんだ。意識を明確にした状態にいる時に失踪すれば、その意識の状態が続くんじゃないかな。早瀬由美さんはそれができる人じゃなかった気がしてきたんだ……亜希子がテレポートする時、いつも俺の所に来ようと思っていただろう。その意識の状態が続いていたから俺の所に現われることができたんだと思う。ということは、失踪状態というのはある意味では危険な状態だということだ。もし、誰も意識的に追い掛けてくれなかったら、この世界に戻って来ることができなくなると思うんだ。特に、ほとんどの人がそうだけど、意識的に生きていないだろう。もしそのまま突然失踪してしまい、誰もそれを気に止めなかったら、永遠にこの世界から消えてしまうようなもんじゃないかな。それこそ神隠しみたいにな。今まで、そんな人たちが沢山いたんじゃないかな。だからある特定の意識を持って瞑想状態に入ると、それと同じ意識で失踪した人の意識と同調してしまう可能性が高いと思うんだ。俺と亜希子が失踪した時、祐子と君たちのお母さんが瞑想して俺たちを呼び戻してくれただろう。瞑想状態に入る前に明確な意志に基づいた意識があったと思うんだ。その状態で瞑想したから、失踪している存在 — つまり俺と亜希子 — と同じ条件になって同調もできたのではないかな。俺が野岸孝子さんと中川愛子さんと竹下辰夫さんと呼ばい戻すことができたのも、直感的にそういう状態に入るべきだと感じてそうしていたからだと思う」

「鹿児島であなたから聞いた失踪のメカニズムの話に比べて、時間の捕らえ方が少し変わったのかしら」

「そうだな、あの時は失踪状態を別空間への移行と見て、その空間では時間経過は無いとだけ考えていた。その時と基本的な考え自体は変わらないけど、ただ失踪状態で現在の意識を維持し続ければ、どうやらこち

ら側の世界の時間経過も認識できるらしいということが分かってきたということだ。その状態は死んだ後の状態とも同じだと思うけどね」

「早瀬由美さんは生まれ変わりの経験を全て覚えていると仰いましたが、死後の世界について何かおっしゃったのでしょうか？」

「うん、死ぬ時のプロセスについて話していたよ。彼女は死んだ時のことはよく覚えているって言っていた。死を状態の変化としか感じないようだ。生きている時も死んだ後も意識が続いているから、死ぬのは何も怖くないって。肉体が死につつある時、魂 — つまり意識が肉体から抜け出してゆくのもわかるみたいだ。死ぬと、意識が生前の肉体と同じ形の別の肉体を作るようだ。だから生きているような錯覚をするみたいだ。それに死んだばかりの時は、まだこの世界を認識できるように、何でも見えるようだ。もっともこの世界の人からは、死んだ者の魂の姿は見えないけど。死んで直ぐの時は空中に浮いているんだって。やがてその身体からも抜け出す段階になると、今度は完全にこの世界のことが見えなくなるようだ。その後は人によって存在する場が異なるようだ。由美さんは繭の中にじっとしている蚕のようだったって言っているよ。自分でそのような世界を作り出しているようだけどね。だから意識が揺れるとその時の意識の状態に応じた世界が顕れるようだ。丁度その時の自分を受け入れる環境が出来るみたいだ。そして意識の乱れが収まるとまたもとの状態に戻るって言っていたな。外側から何か干渉してくると、その静止した状態から抜け出して動き出すようだったって。この世界に生まれてくる時も、何かの意志に促されたようだったって言っていたよ。死んだ後の世界は現世に生きていた時の意識の状態を反映するようだ。そういう意味だと、思考を止めて意識を覚醒させて、その意識を認識して生きることができれば、この世界も死後の世界も違いは無いってことになるよな」

「やっぱり早瀬さんは分かっているのね。あなたの話、何故か頷けちゃうもの。ねえ、亜希子さん」

「はい、お姉様。わたくし今のお話を伺って自分の生きている世界が広がったような気が致します。でも死後の静止状態にいるとき誰が生まれ

てくるように促すのでしょうか」

「俺の考えでは、多分自分自身だと思う。死んで存在している意識の状態もまだ自分の外側の部分だと思うんだ。もっと核心があるように思う。その核心に到達すれば、この世界の全てが自分だということが実感できるようになるのだと思う。その時は自分から派生した全てが見えて、その中で捻れたり歪んだりしている部分が見えてくるんじゃないかな。そんな部分を修正する為に、意識の形を矯正しやすい物質世界に再生するようにその部分、つまり今の自分を促すんじゃないかな。その促す行為についても、本当の意味で働いてない意識の状態 — つまり、死んで静止状態にある意識の状態 — から見れば、外から働き掛けられたと思えるんだと思う」

「それは、唯識で謂う阿頼耶識あらいやしきのような意識の状態かしら？」

暫く黙っていた祐子が口を開いた。

「祐子は唯識を勉強したのか？」

「一度、概説書を読んだだけよ」

「唯識はこの世界のものは実体が無く、全て人間の意識の認識に基づいていると説くけど、一番大事な創造の部分にあまり触れていないんだ。最終的な意識の形態を阿頼耶識と定義しているが、全ての過去の出来事を記憶しているとする阿頼耶識も実は神智学で謂う宇宙の記憶装置アカシックレコードと同じような意味で捉えている。見る側の論理だ。唯識の阿頼耶識も修行を積みれば大円鏡智に到達できるとしているが、それには気の遠くなるような時間が掛かると見ている。俺から見ればそれもまだ最終地点ではないと思う。それに時間の問題ではなくて、意識の純粹さと力が本来の方向に向けば短時間でも本来の場所に到達することが実現できると思うんだ。死んだ後で到達する意識の状態は阿頼耶識ではなくて、まだその未那識まなしきなどという途中段階なんだけど、この世界で歪みを修正して純粹意識にまで磨かれれば、阿頼耶識の状態を得ることもできると思う。そしてそこから核心に向かって突き進むと、さっき言った全てが自分であるという意識の状態に到達できて、この世界の全てを自己の中に見て自由に動かすことが可能になるんじゃないかと思う。素晴

らしい世界さ。祐子も亜希子も俺なんだ、おれも祐子や亜希子なんだ。ただこの世界、この段階ではそれが分からないように外套をまとして隠しているだけさ」

「一寸想像もできないけど、神様も自分だということになるのかしら」
「そう思う。だけど、外側だけを見ていると神様はあくまで神様だ。殆どの人がそういう状態だけだね」

「とっても難しく、わたくしには理解できませんわ」
「俺だって理解できているわけではないよ。ただそう感じているだけだ。実感しないとどうにもならない。和尚に言わせれば瞑想を通してしか実体験はできないようだ」

「早瀬由美さんは、今あなたが言ったことを理解しているのかしら？」
「いや、そんな風に捉えてはいないと思う。彼女の認識力は阿頼耶識に近いところまで行っているように思えるけど、それがどういうことかということまでは理解していないようだ。まあ、理解する必要もないんだけど。今日はこれから少し瞑想をしてみようか？自分の意識がどのレベルにあるのか分かるかも知れない」

「そうね、是非そうしてみたいわ」
「わたくしも自分自身についてももっともっと知りたいと思います」
「知識として知ろうとしてはだめだぞ。知識は本当の自分に到達しようとするとき障害になるだけだよ。だから瞑想の最中に自分の状態を知ろうとしては駄目だぞ。無心にならなくては本来の自分を知ることができない。一寸矛盾しているようだけど実際に知ろうとすれば知ることができず、知ることを放棄した時に知ることができるんだ」

「ややこしいわね。でも、兎に角何も考えなければいいのね」
「そうだ。二人とも準備はいいか？先ず一番楽な姿勢を取ってみて。そう、祐子と亜希子は少し離れて、お互いの身体が触れ合わないようにして。じゃあいいな、これから暫く瞑想をしよう。とりあえず30分ほどやってみよう。隣の部屋のベッドの横に目覚まし時計があるから、それを掛けておくよ。30分したらベルが鳴る。ドアを閉めて、微かに音が聞こえるようにしておこう。瞑想中に衝撃的な音を受けると意識が迷走

する危険性があるからな」

「わたしたち、お酒を飲んでしまったけど大丈夫かしら？」

「そんなことに捕られる必要はない。酔っていたらまずいけど、意識に影響を与えない程度のほんの一口の酒が影響することはない。社会通念で判断しては駄目だ。それに宗教的な戒律に基づいた判断も捨てなくてはいけない」

賢は寝室に行って目覚まし時計をセットしてから戻って来て、瞑想に入る合図をした。3人は瞑想状態に入った。

賢の意識は深い海の底に沈んでゆくように、ゆっくりと静止状態に入っていた。祐子は目を瞑ると、今日賢に会ってからのことが走馬燈のように頭の中に展開してゆくのが分かった。その移りゆくビジョンをただ観照した。それを見るでもなく、それに感情を左右されることもなくただじっと観照を続けた。亜希子は自分がどういう意識を持っているのかと考えてはいけないという気持ちが湧いてき来て、それを振り払おうと必死になった。そして、その必死になる気持ちもいけないんだと思って戸惑っていたが、やっとの思いで思考をそのループから逸らすことができた。すると自分の眼前に今日の琴の稽古で師匠から褒められて、嬉しかった時の感情が湧き上がって来た。亜希子はただ、表れた感情の動きを見つめていたが、やがてその感情も消えて行き、次第に頭の中に青空が広がってくるような感覚を覚えた。賢の瞑想は次第に深まっていった。時々脳裏を通り過ぎて行くイメージもやがて現われなくなり、完全に真っ暗闇の中に自分の存在も無くなっていくのを意識した。しかし恐怖心は起きなかった。以前にも何度か同じような状態に至ったことがある。その後はずっと暗闇だった。暗闇の中に居ると感覚の主体が無くなってきてただ心地よい歓喜で満たされた。祐子の眼前には広い高原が広がった。そこには、ニッコウキスゲのような黄色い花が一面に咲いている。意識が地上から3メートル程上空にあって草原の上を滑空しているような感覚を覚えた。その感覚はいつまでも続いた。黄色い花は波打つように祐子の通る方向に通路を開いているようだった。亜希子は青空の下で、喜びと感謝の感情に満たされていた。青空には全く雲が無い。亜希子は

知らない内に青空の一点に意識を集中していた。その青空に吸い込まれてゆく自分を感じた。どこまでも意識が上昇してゆく、地球が眼下に見えてきて次第に小さくなって行く。やがて側面に月が見えてそれも直ぐに遠ざかって行った。亜希子はいつまでも続く意識の上昇に目が眩むような感覚に捕らわれた。その時、微かなベルの音がした。それはずっと下方に見える地球から聞こえて来るようだった。急に下降が始まった。下降は初めに青空を見上げていた自分の位置に戻るまで続いた。亜希子は目を開けた。賢も祐子も目を開けた。30分が経過したようには感じられなかった。祐子と亜希子は瞑想中には時間経過が感じられないというのは確かだと思った。ふたりとも5分程度の時間経過しか感じなかった。

「時々瞑想をするといいよ。本当の自分を知ることができるのは、この世界では瞑想を通してしかあり得ないからな」

「何となく、分かるような気がするわ。ねえ亜希子さん」

「はい、わたくしもそんな気がします」

少しして、ふたりは賢のアパートを後にした。賢の部屋はいきなり静寂に包まれた。賢は由美のことが気になってきた。クローゼットに掛けたジャケットのポケットを探って、由美から受け取ったメモ用紙を取り出すと由美の家に電話を掛けた。

「もしもし、早瀬でございます」

「もしもし、わたくしは内観と申しますが、由美さんはご在宅でしょうか？」

「あっ、内観賢さんですね。このたびは娘を救って頂いて本当にありがとうございました。わたくしは由美の母親でございます。由美は今自分の部屋におります。すぐ呼んで参りますので暫くお待ち頂けますか？」
電話に階段を駆け下りる音がして、直ぐに由美が電話口に出た。

「賢さんですか？気に掛けて頂いてありがとうございます」

「元気そうだね。警察とか、新聞社とか、いろいろ大変だったんじゃないか？」

「ええ、電話が一杯掛かってきました。今一段落して寛いでいたところ

です」

「それは悪かった」

「いいえ、あなたの声を聞いたら、疲れも飛んでしまいました。あれから会社に寄ってみました。みんなビックリしていました。わたし、会社の人たちとの付き合いがあまりありませんでしたから、みんなも何と言っていいか分からなかったようです。でも会社は規定で解雇されていました。仕方ないですね。暫くはのんびり過ごすつもりです」

「君のことを気にしていた佐貫さんには会ったのか？」

「ううん、物質化研究会は辞めるつもりよ、降霊会も。佐貫さんには悪いけどこちらからは連絡したくないわ。あの人、いくら断ってもしつこく連絡してくるのよ。もし何か言ってきたらはっきりと断るわ。もうわたしはあなたに巡り逢えたのだもの」

「テレビ局からインタビューの申込なんかは無かったか？」

「初め警察から何度も電話があったの。電話でいろいろ説明したわ。でも、あなたが的確に説明してくださっていたから、あまり追求はされなかったわ。警察からの電話が一段落したら今度はテレビ局が五月蠅かったの。ついさっきまで外に沢山のテレビ局が来ていたわ。新聞社も来ていたの。あのCBAテレビがインタビュー会見番組に出演して欲しいって申し込んできたわ。明日の午前中インタビューに応じることにしたの。あなたのことも聞かれたけど、「わたしはよく知らないので、警察に聞いて欲しい」ってとぼけておいたわ」

「俺のことまで気遣ってくれてありがとう」

「当然のことよ。わたしはあなたの一部ですもの」

「身体の具合はどうだ？」

「大丈夫よ、ありがとう・・・・・・お母さん、あっちに行っててよ」

由美が母親に向かって言っている言葉がそのまま聞こえてきた。

「・・・・・・わかったわよ、この娘ったら・・・・・・少しわたしにもお礼を言わせてよ」

「もしもし、賢さん、母がお礼を言いたいわって言っているわ」

「もしもし、電話を代わりました。今度のことでは由美がすっかりお世

話になりまして、何とお礼を申し上げてよろしいやら。内観さん、一度娘と一緒にお食事に招待させて頂けないかしら」

「恐縮です。今はまだ由美さんの状態が不安定な上、警察やらメディアやらが五月蠅くて大変でしょう。マスコミからの集中攻撃も収まって、由美さんの健康状態に問題が無く、正常な生活ができるようになったら一度ご一緒させて頂きたいと思います。それまで、おかあさん、由美さんの身体を気遣ってあげてください」

「内観さん、お優しいのね。今後とも、娘のことをよろしくお願い致します」

「もしもし、お母さんたら、いろいろおせっかいを焼いて・・・でも、わたしも賢さんと一緒にお食事ができるのを楽しみにしています」

「それじゃ、今日は早めに休んで普通のペースを取り戻すように」

「ありがとう、おやすみなさい」

「おやすみ」

賢は渋谷での出来事は口にしなかった。話せば由美に余計な心配を掛けると思った。電話を切って意識を由美に集中してみた。喜びの感情が湧き上がってくる。眼前に中年の女性の顔が映った。それが由美の母親らしいと思った。辺りの感じからして、どうやら由美は居間のような所に母親と向かい合って座っているようだ。時々喜びの感情が熱波を受けた時のように体中に広がるのを感じた。由美が何かを母親に見せているようだ。それは賢が買って与えたコートと財布のようだった。少しすると階段を上る感覚がして、由美が部屋に入ったのが分かった。部屋に入ってドアを閉めると、手に持っていたコートと財布を抱きしめる感覚と強い喜びの感情が伝わって来た。続いて由美の顔が見え、全身もはっきりと見えてきた。ふと気付くと、ソファの横に由美が立っている。手にはコートと財布を持っている。由美はビックリしたような顔をして賢を見つめた。

「どうしんだ？」

「分からない・・・あなたのことを思ったら、ここに来てしまったの」

「おれも、今、君に意識を集中したんだ。お互いが相手に意識を集中さ

せるとテレポーションが起きるようだな」

「そうかしら。わたし、あなたのことを思ったら、感情が高まって来てどうしても会いたって思ったの」

賢は立ち上がって由美に近づき抱きしめた。

「わたしどうしたらいいかしら」

「少し休んだら、君の家に送って行くよ。どうやら俺たちはもう切り離すことのできない関係になったようだ。これからは相手に意識を向ける時は注意が必要だな。先ずはお母さんに電話を入れよう。気付いていないかも知れないけど、一応知らせた方がいい」

賢が渡してよこしたスマホで由美は自分の家に電話を掛けた。由美の母が直ぐに出た。

「どうしたの？あなた、お部屋に戻ったんじゃないの？」

「ううん、一度は戻ったのよ。でも賢さんのことを思ってたら、自然に賢さんの部屋に移動してしまったのよ」

「ええっ！そんなことってあるの？そこはどこ？」

「賢さんのお宅よ。これから少ししたら家に帰るわ。驚かせてごめんなさい」

「兎に角、帰って来たら詳しいことを聞かせてね。あなたには本当に驚かされるわね。内観さんによろしく言ってね」

由美は電話を切った。スマホを賢に返しながら言った。

「わたしたちあの時からもう別々じゃないのね・・・もしかしたらあなたとわたしはテレパシーで話すこともできるかも知れないわね。そうしたら、こういうことも避けられるかもしれないわ」

「うん、その可能性はあるな。少し試してみようか？いま、俺が君にあることを伝えるように意識を集中してみるよ。君は何も意識しないで、勿論俺のことも考えないでいてみてくれ。それじゃ、話し掛けるよ」

賢は由美の知らないことを語り掛けてみることにした。

「海の老人のことを知っているか？」

由美は口で応えた。

「「一緒に海に行かないか？」って聞いたでしょう？」

「いや、違う。もう一度送ってみるよ」

賢は同じことを問い掛けてみた。

「「海を知っているか？」って聞いたの？一寸違ったかしら」

「もう一步だな。「海」と「知っているか？」は合っているよ。もう一度やってみる」

賢はもう一度思考を止め、瞑想状態に入って同じことを問い掛けてみた。

「「海と老人？何かしら、知っているか？」って聞いたのね・・・よく分からない」

「全く聞いたことのない話を伝えるのは難しいのかも知れないな。今の質問は「海の老人を知っているか？」って謂う質問だよ。もう一度やってみよう。今度は知らない言葉を使わないで話し掛けてみるよ。いいか、始めるよ」

賢はさっき由美が母親と話していたことを訊いた。「さっき、お母さんと何を話していたんだい？」と質問すると、直ぐに由美が反応を示した。

「わたしお母さんに、あなたから戴いたコートと財布を見せたの、そしてたらお母さんが、コートが似合うって言ってくれたのでとっても嬉しくなったの。それから、あなたのことを話していたのよ。おかあさん、あなたがとっても優しそうだって。あなたのこと気に入ったみたい」

そう言うと、由美は少し顔を赤らめた。

「どうやら、おれの質問が分かったみたいだな・・・あっ、そうだわ。わたし、あなたが話しているように感じたわ。まるで声を聞いているようだった。でも一寸、音が聞こえるのとは違うわね。直接頭の中に声がするって感じよ」

「よし、今度は君が俺に話し掛けてみてくれないか？できるだけ俺の知らないことをな。まず心の中からあらゆる思考を取り除いて、俺に話し掛けることに意識を集中してやってみてくれないか？」

「分かったわ。それじゃ話すわね。「あなた、わたしの父はどうして居ないか分かる？」」

賢は普通の状態を保ち、由美のことも念頭に置かないで、海の老人のことを考えてみたりしたが、その時頭の中に声が聞こえてきた。「あなた、

わたしの父がどうして居ないか分かる？」という問い掛けだった。

「由美、今聞こえたのは「あなた、わたしの父がどうして居ないか分かる？」という言葉だけど、そう言ったのか？」

「そうよ、一言一句違わないわ」

「そうか、どうやら俺と君の間ではテレパシーが使えるそうだな。今度はお互いに意識を集中する前に、テレパシーで話し掛けた方がいいな」

「ええ、そうしましょう」

「それじゃ、そろそろ家に送ってゆくよ」

「その前に一寸聞いてもいいかしら。さっき仰っていた海の老人ってどなたですか？」

「海の老人は時々俺たちの前に姿を顕して、真理を教えてください方だよ。今度の失踪事件解明への糸口を教えてください方だ。君は会ったことないかな？ちょっと派手だけど、普通の老人と大して違わない服装をしているんだ。よく海に現れるんでみんな海の老人って呼んでいるんだ」

「わたし、存じ上げません。一度お会いしたいと思います」

「その内、会えるかも知れないな。俺たちも自分たちの意志でお会いすることはできないんだ・・・そう、君のおとうさん、どうされたんだ？俺も一寸気になっていたんだけど」

「父はわたしがまだ小学生の頃に亡くなりました。わたしはそれから母の手で育てられたんです」

「そうだったのか。お母さんも大変だったな。それに今度の君の失踪でさぞ気落ちしていたんだろうな」

「母は気丈な人ですから顔に出しません、わたしが居なくなって随分悲しい思いをしていたようです。わたしが家に戻った時、顔が涙でぐしゃぐしゃでした。わたしは親不孝をしてしまったって思ったんです」

「そうか、それじゃあ早く帰ってお母さんを安心させてやらなくてはいいね」

賢はタクシーを呼んだ。由美の家に着いたのは12時を廻った頃だった。玄関の扉を開けると、母親がそこに立っていた。

「由美、一体どうしたの？わたし頭がおかしくなっちゃうわ。さあ早く上がりなさい。内観さんでいらっしやいますね、大変お世話をお掛け致しました。どうぞお上がりになってください」

「初めまして内観です。もう夜分遅いですからわたくしはこれで失礼致します」

「そんなことをおっしゃらずに、もう電車も無いでしょうし、今晩はわたくしどもの所に泊まっていてください。そうしなくては申し訳が立ちません」

由美の母が何度も頼むので、賢は申し訳なさそうに言った。

「それでは、お言葉に甘えて泊めさせていただきます」

母親は嬉しそうにいそいそと賢を居間に案内した。居間は6畳程度の広さで、そこに二人掛けのソファとテーブルが置いてある。壁には書棚を兼ねた飾り棚があり、そこに由美を真ん中に父親と思われる男性と母親が並んで立っている写真が飾ってある。由美がまだ幼い頃の写真だった。賢は由美が直ぐに分かった。由美は幼い頃から可愛い顔をしていて、現在の面影を感じさせた。母親に促されて賢と由美は二人掛けのソファに並んで座った。母は直ぐにお茶を入れて持って来て二人の前に置くと、自分はカーペットを敷いてある床の上に正座して座った。

「内観さん、この娘のこと、いろいろ助けてくださって何とお礼を申し上げてよろしいか分かりません。この娘にはどうしてこんなことばかり起こるのでしょうか？」

「昨年7件の失踪事件が起きましたが、失踪された方々はみな、同じような状態になったことが分かってきました。由美さんも大体同じような状態でした。今お話ししても詳しいことはご理解頂けないかも知れませんが、最近起きている地磁気の異常や気候変動などの異常現象は全て、わたくしたちの生きている「場」の変動に起因しているのです。そして、その「場」というのは人間の意識の反映で決まってくると考えられます。今、人類の意識に不安定な変動が起きているので場がそれに伴って不安定に変化しているようなのです。それが一部の人には肉体の存在にまで影響しているのです。特定の意識状態になると失踪したり、遠くに瞬間

移動したりするのです。由美さんは非常に強い意識の持ち主ですので、自分自身にそのような現象を発生させてしまうのです。でも、これは悪いことではなくて、時代に先駆けているということなんです。少なくとも僕はそう見えています。お母さん、あまりご心配にならない方がいいと思います。僕も微力ながら由美さんの意識が安定するようにお力添えをさせていただきます。由美さんのことを見守らせて頂きます」

由美の目が潤んでいるのを見て母親が言った。

「内観さん、お話しが難しいので全部は無理ですけど何となく分かりました。あなたのおかげでどれほど心強いか知れません。ご覧の通りあまり大きな家ではありませんので、お泊まり頂くようお願いしても、広いお部屋は用意できませんが許してください」

「泊めて頂けるだけで十分です。わたくしは丈夫ですからどこでも休めます」

「賢さんにはわたしのベッドで寝て頂くわ。今日は、わたしはお母さんの部屋で休むわ。久しぶりに親子水いらずで休みたいのよ」

「それでは内観さんに失礼になるんじゃないかしら」

「大丈夫よ、賢さんは優しい方だから。ねえ賢さん。わたしのお部屋で休んで欲しいの」

「僕はどちらでも構いません。由美さんがそれでよろしければ」

由美と母親はそそくさと2階に上がって行った。賢は居間で待った。その間に二人は寝具の準備をした。暫くして母親が男物のパジャマを持って戻って来た。

「これはこの娘の父親が使っていたパジャマですけど、よろしければお使い頂けますか？」

賢は喜んでパジャマを受け取った。由美に案内されて由美の部屋に入ると、ベッドには新しいシーツと客用の布団が用意されていた。由美は部屋のドアを閉めて賢に近づくと

「お休みなさい」

と言って、いきなり賢に口づけし逃げるように出て行った。賢は由美の背後から「お休み」と言って、ドアを閉め衣類を脱いで用意してもらっ

たパジャマに着替えた。部屋の中はこれといった飾りもなく、テレビでよく見掛ける普通の若い女性の部屋の様ではなかった。壁に淨蓮の滝の写真が貼ってある。その横に1編の和歌を書いた短冊が下がっていた。「巡り来る 陽に萌え初める つめくさの 揺れる旅路に 君を訪ねん」過去世のことを思って詠んだ歌かと思いながら賢はベッドに潜り込んだ。翌朝目を覚ますと、部屋の掛け時計が7時10分前を差していた。賢はベッドから出て直ぐに服を着替え、布団とシーツを直してその上にパジャマを置いた。それから部屋を出て1階に降りた。居間に入ってゆくと由美と母親と一緒に朝食の準備をしていた。食卓の上には出来上がった朝食が並べられている。由美が賢に気付いた。

「賢さん、おはようございます」

由美は口元に微笑みを湛えて、目を大きく見開き賢を見つめた。

「おはようございます」

母親がすぐに賢の近くまでやって来た。昨夜と比べふたりとも随分色つやが良いように賢には感じられた。

「おはようございます。よくお休みになれましたか？」

「はい、ありがとうございます。とってもよく眠れました」

「賢さん、歯ブラシとタオルを用意しましたからどうぞお使いになってください」

由美が賢を洗面所に案内した。シンク前の鏡はきれいに磨き上げられていて気持ちがよかった。賢は顔を洗い身繕いを正してから居間に戻った。母親が賢に席に着くように促した。既に朝食の準備が調っていた。母親が言った。

「由美がこんなに明るいのは15年ぶりですよ。昨日は、久しぶりに親子水いらずで明け方まで話し込んでしまいました。でも今朝はとっても清々しくて・・・家の中に男の人が居るところも違うものでしょうか」

3人は和やかな中に朝食を済ませた。賢が暇乞いをすると、母親は由美に賢を駅まで送るように促した。由美は賢に身体を寄せるようにして歩いた。駅に着くと由美は賢が改札を抜け姿が見えなくなるまで見送って

いた。賢はひとまず自分のアパートに帰った。

その日からの1週間は賢にとって多忙極まりない日々であった。その日の午前中に渋谷警察署から呼び出しを受け、状況説明や目撃証言などを求められた。午後には大仁警察署からの問い合わせもあった。夕方6時に鶯谷の Snackbar で楠木と田辺に会った。二人共前回と同様スーツ姿だった。賢はジャケットを身に付けていた。賢は二人に対しプロジェクトの取り組むインフラの形態について、自身の考える企画案を何件か用意するように依頼した。この依頼には賢の意図も含まれていた。その企画案を通して二人がどのような考え方をする人間かを知りたかったのである。ふたりは了解した。賢は、自分の意見は口にしなかった。3人は1時間ほど打ち合わせた。次回は年末に賢が連絡することとして別れた。楠木は懇懇に頭を下げてその場を去った。田辺は笑窪を作って賢に挨拶をして去った。賢は疲れていた。余りにもいろいろな出来事が続いたので少し休息したいと思った。しかし、その後も警察から何度も連絡があり休むことなど到底できそうになかった。天城の河合楼から情報を得たのかテレビ局からの問い合わせも何度かあった。インタビューに応じて欲しいとの要請も受けたが賢は全て断った。しかしCBA放送は執拗だった。由美の家に泊まってから3日目の午前10時過ぎにアパートを出た時、待ち伏せしていたCBA放送のカメラマンと記者に捕まってしまった。CBAは以前、江川勝児の失踪をシミュレートした番組と、愛子の帰還時にドキュメンタリー番組を放送したことのある放送局である。鹿児島の失踪事件の時から賢をマークしていたとのことだった。彼らはこれまで解決済みの全ての失踪事件に賢が絡んでいることを見抜いていた。由美の帰還した日に由美と一緒に河合楼に宿泊したことも知っていた。しかし、プライバシーの保護の点から直接放映することは控えているとのことだった。幸いなことに、写真週刊誌や新聞社はどこも失踪事件の陰に、ある人物の存在が疑われると気付いてはいても、それ以上踏み込めないでいた。帰還後の記者会見の時、どの帰還者も賢について一言も口にできなかった為である。CBA放送の記者もメディア各社はみなキーとなる人物が存在しているということに気付いているはずだと話し

た。他社に立ち入れられないようにすることに協力するとも言った。初めは断り続けたがあまりの執拗さに賢も終に兜を脱いだ。記者を伴っていつものレストランに入った。

「ところで、どんなことを話せばいいんでしょうか？」

「まず、これまで解決した失踪事件にあなたがどこまで関係していたかをお話し頂きたいと思います」

記者は少し遠慮がちに話を持ち出した。

「この取材の目的を教えてください」

「我々はメディアの人間です。昨年起きた失踪事件で国民の多くが不安を抱いていたはずで、それらの事件が最近次々に解決されてゆくわけで、我々は何故失踪事件が起きて、どんな過程で問題が解決したのかを国民に知らせる義務があると思うのです。少なくともあなたがそのことに深く関わっておられるようですので、それをお聞きしたいと思う訳です」

「わたくしの名前を伏せて頂けますか？それから、住所などの個人に関する事項を放送しないと誓って頂ければ概要を説明します。それと、これからわたくしは多くの人に顔を知られてしまうと進めにくい仕事に着手することになっていますので、顔もマスクングして頂きたいのです。勿論悪い仕事をするわけではありませんから、その点にご懸念には及びませんが」

「わかりました。それでは、あなたについてはXさんという表現で、顔はマスクングし声もデフォルメして放送します」

賢は了解し概要を話した。先ず何故失踪事件が起きたかを地球環境の変化という観点から説明した。環境の変化は人間の意識の反映によるものだとして説明した。記者には賢の話がよく理解できないようであったが、記録は取っていた。失踪事件については、鹿児島で自分も失踪し、自分の友人によって帰還を果たすことができたこと、その時の経験を用いて、愛子、孝子、竹下、由美と順に帰還を果たすことができたことを説明した。記者はそれぞれの帰還についてもっと詳しく説明して欲しいと言った。賢は、帰還させる方法について詳しく説明するとそれを真似るもの

が出てきて、失踪が頻発してしまう危険性があるので詳しくは話せないと断ってから、それぞれの帰還の経過を簡単に説明していった。愛子の帰還に関しては、麻子に対し、絶望感から脱して愛子に対して愛情を持って意識を集中させることを促したこと。野岸孝子の帰還については子供達に対して愛情を持って孝子と呼び寄せるように働き掛けたこと、竹下については絶望感と自責の念を払拭して、過去の友情心で帰還を呼び掛けるように導いたこと、由美については賢自身が由美の固有振動に同調して引き戻したことを説明した。そして、失踪事件の発生と現状への帰還は当事者の意識の持ち方で起きたことであり、現在地球環境が全地球レベルで悪化しているのは、人類の意識が自然を蔑ろにし、支配しようとして経済主導で環境破壊を繰り返していることが原因であり、今回の失踪事件の発生と同じ原因だと説明した。生態系や自然の構成物の消滅は時間を掛けて起きてくるだろうと言った。記者は地球環境については京都議定書に基づいた地球環境保護の必要性について国民の多くが同調してきていると言ったが、賢の説明している人類の意識との関係について真意を理解するには至らなかった。記者はまだ聞きたいことが沢山あるようだったが、賢はそれを断ってレストランを出た。この突然のCBA放送のインタビューの後も週刊誌や新聞社からの問い合わせが続いたが、賢はいずれに対しても取材を拒否した。CBA放送のインタビューに答えた2日後、写真週刊誌に賢と由美の虚偽の記事が写真入りで掲載された。それは二人が河合楼から一緒に出て来た時の写真だった。『1年前の浄蓮の滝での失踪事件からの帰還、そして、湯ヶ島温泉旅館での宿泊・・・失踪事件の真相とは?』という長いタイトルの記事で、4ページに渡る想像に基づいた捏造された内容が記載されていた。その記事は由美と賢を実名で紹介していた。流石に住所までは記載していなかったのが賢は胸を撫で下ろした。その記事には『早瀬由美が賢との関係を親や親戚に問い詰められ、それを隠す為、暫く伊豆地域に身を隠していたが、1年が経過してほとぼりが冷めたと考え、失踪からの帰還を装って元の社会への復帰を図った』と説明されていて、『早瀬由美は降霊会や物質化研究会などの怪しい組織に加入している胡散臭い人間だ』と

説明していた。賢については『鹿兒島で失踪し、帰還した男で、失踪と帰還を偽装して人の注目を引こうとする目立ちたがり屋』とまるで犯罪人でもあるかのような扱い方をしていた。『早瀬由美との関係はずっと以前から続いていたようだが、賢には他に恋人がいる為、早瀬由美との関係を隠すように早瀬由美に強く迫っていたと見られる』というスキャンダラスな内容を想起させる記述もあった。全くのでっち上げの記事だった。祐子からその雑誌の記事を見せられても賢はただ苦笑しただけで何も言わなかった。祐子は写真週刊誌を訴えようかと言ったが、賢は放っておくように言った。藤代肇からも電話があったがでっち上げだと説明した。数馬も心配して電話を掛けてきた。CBA放送の『失踪事件の原因と解決』と題したドキュメンタリーが組まれたのは写真週刊誌に虚偽の記事が掲載された3日後だった。暮れが押し迫った12月23日の夜9時からの放送であった。テレビ局から賢に放映の連絡があった。賢は祐子と亜希子にアパートに来るように伝えた。二人を待っている時、由美からのテレパシー通信があった。9時からのドキュメンタリーのことだった。由美もインタビューを受けたから多分出るはずだと言っている。賢は自分も突然のインタビューの要求を受けたけれど名前を伏せるという約束でインタビューに応じたと返答した。由美から、賢への愛の感情が送られて来るのが分かった。賢も優しさを返した。祐子と亜希子は二人とも8時過ぎに興味津々の体でやって来た。賢の部屋に入ると「本当はもっと速く来たかったが、昼間ふたりで出掛けていたので来られなかった」と弁解した。コーヒーを飲みながら3人はソファーに座ってテレビを点けた。ドキュメンタリーはこれまでに発生した失踪事件の幾つかをダイジェストで伝えることから始まった。先ず5つの失踪事件が紹介されていた。その内の2つは失踪者が死亡した状態で発見された事件だった。その2件の事件は失踪から3ヶ月程度で解決を見ていた。一つは失踪者の過失で崖からの転落死という結末、もう一つは外国人の変質者による誘拐殺人であり、国際法廷で審理中の事件であった。残りの3つが早瀬由美と江川勝児そして原智明の事件だった。キャスターは早瀬由美のケース以外の失踪事件に附いては後ほど紹介すると説明した。由

美の事件は「浄蓮の滝での突然の失踪」と紹介された。江川勝児の失踪事件は以前このCBAがシミュレーション放送を行った時の内容を交えての紹介で、『謎は深まるばかり』とコメントしていた。そして原智明の失踪事件については原の失踪とそれを調査する為に鹿児島を訪れた男女が失踪したが、直ぐに帰還したことと、その直ぐ後に原智明研究所の所長が失踪したことを説明し『その謎はいつ解決されるのだろうか?』と解説した。賢と亜希子についてはただ『男女』としてだけ紹介し詳しい説明を省いていた。祐子が言った。

「鹿児島のこと、いずれは知れ渡ってしまうわね」

「そうだな、これだけ失踪事件に拘わっていたら隠し続けることは難しいだろうな」

やがてドキュメンタリーは『最近解決した失踪事件』というタイトルの字幕に続いて、キャスターが1テーマずつ取り上げて解説してゆく場面に移った。初めは早瀬由美の事件だった。番組の初めの失踪事件紹介の一駒とは違い、もっと現実味を帯びた丁度ニュース速報のような紹介がなされてから、由美のインタビューがあった。由美の顔はマスクングされていない。緊張の中にも顔一面に微笑みを湛えた喜びに満ちた顔をしている。インタビュワーは失踪の時の説明を求めている。由美は「人を探していて意識を失ってしまったので、後のことは分かりません」と言った。誰を捜していたのかとの質問に対しては、「個人的に大切に思っている人だけど、応えることはできません」と防衛線を張っている。しかし帰還できた時の話になると、やや饒舌になって「その探していた人に巡り逢えたので意識が戻りました」と、自ら暴露してしまった。インタビュワーは「白雪姫のような話ですね」と言った。由美は「本当にそんな気がします」と応えていた。インタビュワーは空かさず、「その方があなたを帰還に導かれたのですか?」と聞いたが、その質問を受けて初めて、由美は自分が賢のことを間接的に白状してしまったことに気付いて少しうろたえた。しかし質問には答えなかった。インタビュワーもそれ以上追求はしなかった。続いて、賢へのインタビューの紹介があった。賢の顔はマスクングされていて、声もデフォルメされていた。賢が

この事件について説明している部分が紹介されていた。インタビューを受けた時とは順番を入れ替えて、何故このような事件が起きるのかを説明した部分が、早瀬由美のケースの最後に紹介された。祐子が言った。

「早瀬由美さんのインタビューであなたのこと分かっちゃうわね」
その時、賢の脳裏に由美の「ごめんなさい」と言う声が聞こえてきた。賢は「いいんだよ」と応えた。祐子は賢が応えないので、少し肩透かしを食った感じがしたがそのままテレビに視線を戻した。キャスターが愛子の話を始めた。先ず和歌山にある愛子の家の映像が出て、この家の中で愛子が失踪したと紹介をし、次に画面は紀ノ川の堤防沿いの景色に切り替えられて、1年後にここに愛子が帰還したと補足説明が為された。その後、麻子のインタビューがあった。一度見たインタビューだった。インタビュワーの質問に対して麻子が応えている。亜希子は青森で賢と過ごした夜を思い出した。

「でも、あなたはあの後すぐご主人と離婚されてしまいました。夫婦の間に強い愛情が無くても、それが可能なのでしょうか？」

「わたくしにもよく分かりませんが、愛情はエネルギーみたいなものだと感じています。初めは自分が誰かを愛しているとか、自分が誰かに愛されているという意識がありますが、愛が強まって来ると、愛している自分と、自分が愛している相手との区別がつかなくなってしまいます。そして、更に自分も相手も無くなったようになって、だだ愛情の中に浸っているという意識だけになって、最後には意識というより愛そのものという状態になったような感じになってしまいます。一種の自己喪失です。唯、^{よろこび}歓喜だけがあるような感じです。わたくしが愛子と呼ばれている時もそういう状態になっていました」

「過去に悟りを得た覚者と言われる人が、よくそのようなことを言っています、まさにそういう状態を経験されたということでしょうか？」

「はい、わたくしの感覚では、失踪というのは完全な自己喪失、肉体までも失った状態じゃないかと思うのです。原因は分かりませんが。その状態と同じような状態になって失踪者と一体化することが、失踪者の帰還への鍵だと思います」

インタビュワーが「感服した」と感想を述べてから、愛子の紹介に移った。カメラはスタジオに姿を現した愛子を写し出した。愛子のインタビューの録画映像だった。続いてまた麻子が質問を受ける場面になった。「麻子さんに伺いますが、あなたは一人娘の愛子さんを失ってしまって、絶望の中にいらっしゃったと思いますが、どのようにして先ほどおっしゃったような愛の境地に至ることができたのでしょうか？差し支え無ければご説明頂けますか？」

「はい、わたくしは絶望の中にいました。その時、家に一人の方が訪ねて来てくださって、その方に導かれてあのような体験をすることができたのです」

「その方は、どのような方ですか？個人的なことでするので、差し障りのない範囲で答えて頂ければと思います」

「申し訳ありません、その方のことは申し上げられません。ただ、わたしは、たった今、無条件でその人の為に死ぬことができます」

「分かりました。もうこれ以上その方については質問致しません」

この放送は以前放送したものと同じだとの説明があり、愛子のケースはこれで終えていて、賢へのインタビュー部分は放映されなかった。賢は放送局が配慮してくれたのだと思った。亜希子が賢の右手を握り締めた。亜希子の目が潤んでいることに賢は気付いた。

「麻子さんは素晴らしい体験をされたのですね」

「このシーンは、この間放映されたシーンと全く同じね。嫉妬心の前に、感動を覚えるわ」

祐子が言った。

「麻子さんは随分苦労された方だ。愛子さんが戻って今は幸せな生活を送っているんじゃないかな。あの方の苦しんでいる姿を思い出すと、目頭が熱くなってくる」

祐子は賢の目に薄ら涙が浮かんでいるのを知った。賢は麻子がどうしているだろうかと心配になってきた。その時再び由美が話し掛けてきた。

「麻子さんの言う一人の方って、あなたですね」

「そうだ」

「すばらしい方ね」

「俺もそう、思う」

テレビ番組は野岸孝子のケースに移っていた。ゆきと太郎、信次の3人が玄関前に並んで立っているところが映し出された。少し間をおいて太郎と信次が飛び回っているシーンになり、そしてそこに野岸孝子が微笑みながら立っている。家族揃ってインタビューを受けたようだった。

「わたくしは、自分の身に起きたことを未だに理解し兼ねています。どうしてあのようなことが起きたのか、どう考えても分かりません」

「どこで失踪されたのですか？その辺の所を少しご説明頂けますか？」

「わたくしは車の中で失踪したようです。エンジンを掛けたらそのまま意識が無くなりました。そして、気が付いたら元の車の中に居ました。と言うか、わたくしとしては何にも起きていないような感覚なのです。だって時計は何も変化していなく、正常に時間を刻んでいましたし、家の周りの景色も変わってなくて。そう、帰還した時に地面に着いていた轍も失踪する前のままでした。でも周りの世界が1年間、あっという間に過ぎてしまったのです。不思議なんですよ」

野岸孝子は近づいて来た信次の頭を撫でながら応えた。

「あなたは、あの失踪の少し前にもお勤め先で少しの間失踪されたそうですね」

「はい。皆がそう言います。わたくしはそんな感覚は全く無かったんですが」

「でも、今は失踪されたことを自覚されているわけですから、何か考えられる失踪の原因のようなものは思い浮かびませんか？」

「あの時はわたくしの夫が無実の罪で秋田刑務所に服役していたのです。わたくしは何とか夫を救い出したいと必死でした。そして、ここ遠野から秋田までの距離がもっと縮まらないかと、そんなことばかり考えていました。いっそのこと夫の近くに寄り住もうかとも考えましたが、子供達のことを思うとそれはできないので一種のジレンマに陥っていたことは確かです」

「あるいはそれが失踪の原因だったと思いますか？」

「多分そうだと思います。それしか思い当たりません。でも、わたくしの娘や息子達がしっかりしているので、どんなに心強かったことか。わたくしがこうして帰還できたのも、娘ゆきのおかげです」

近くにいるゆきにカメラが向いて、インタビュワーがゆきに矛先を移した。

「あなたはお母さんが戻られるとき、どのような体験をされましたか？」
「わたしは一人の方にどうしたら母を呼び戻せるかを教えて頂きました。そして、その方とご友人の方のご指導に従って、*****母を呼び戻すことができましたのです。今でもその方を尊敬し、感謝しています。その方がわたくしたちに優しくしてくださったので、わたくしたちの心が安定してきて母を呼び戻すことができましたのだと思います」

「瞑想をして」という部分はピーという音でマスクングされていた。賢は放送局が自分の要望を受け入れてくれたことに感謝した。キャスターは賢のインタビューについて説明した。「今回の失踪事件の解明を側面から支援した方がいます」という説明の後、賢へのインタビューが放送された。やはり顔はマスクング、声はデフォルメされていた。

「野岸孝子さんには大切な3人のお子さんと、単身赴任中のご主人がおられます。その4人への愛情が帰還を成功させることのできた最も重要な要因だと考えます。これらの失踪事件でわたくしの感じたことは、失踪された方はいずれも、心の中に少しも矛盾を持っていなかった方々だと思います。つまりは心の純粋な方々だったと思います。野岸孝子さんも同様で、娘さんやふたりの息子さんと接してみてその自然な生き方が分りました」

番組はキャスターの説明に続いて竹下辰夫のケースに移った。竹下の失踪事件はキャスターからの説明を中心に展開された。刑事事件報道の影響を懸念しての措置だった。初めにこの失踪事件が1年前に発生した殺人事件と関係しているとの説明があった。失踪事件より、むしろ殺人事件が何故起きたのか、そして、それがどのように解決されたのかが説明された。幸い賢達の懸念していた大河原早苗の個人的な内容は説明から外されていた。暴力団の男が早苗に脅迫を行い、金を騙し取ろうとして

いたことと、早苗の夫の友人竹下の車を盗んで青森まで行き、脅迫を行ったこと。それを知って、身を挺して助けようとした竹下が初めに暴力団の男の運転している盗難車の中にテレポーションしたこと。その車の中には脅迫を受けていた早苗が拉致されていたが、竹下の突然の出現に驚愕して奇声を上げた為、その衝撃で竹下は失踪状態になってしまったこと。早苗は逡巡している暴力団の男の運転する車から抜け出して、逃げたこと。暴力団の男も驚愕して逃げようとしたが、途中で自分が脅迫を行ったことに気づき、自分を警察に訴えろと言った早苗の義母の言葉を思い出して早苗の家に向かい、義母と娘達を襲って拉致し、殺害して逃走したことが説明された。最近この暴力団の男が、以前発生した偽装強盗傷害事件の被害者の自白により真相が明かされ、逮捕されたと説明された。竹下の帰還については、早苗を救おうと必死になっている竹下に対して、早苗が意識を集中させて帰還させることができたことを説明した。そして、事件の結末の説明の後に、賢へのインタビューの紹介があった。映像にマスクを掛けられた賢は、早苗が、自分を救おうとして失踪してしまった竹下に対する感謝の気持ちで竹下に働き掛けて帰還を果たしたこと、竹下を呼ぶときに早苗は心の中にある全ての引っ掛かりを取り除いたことを説明した。解決済みの全ての失踪事件が終了すると、キャスターは失踪状態とはどういう状態なのかということについて、賢がインタビューの中で話した内容を引用して説明した。失踪者は失踪中、大抵の場合意識が無く、時間が経過しているのか、いないのかも分からない。だから、帰還した人は失踪した時の心の状態のまま戻って来る。今日説明した帰還者の全員が、自分が1年以上もの間失踪状態にあったことに対する自覚が無かったこと、そして、実際に失踪者の腕に付けていたり、一緒に失踪した車の中にあった時計は失踪時の時刻を指していたことを指摘し、失踪している間彼らは一体どこに居たのか、現在、地球環境の悪化によって時空に歪みが出来てきていて、彼らはその歪みによって出来た異空間に行っていたのか？と意味不明な仮説を述べ、疑問を投げ掛けて番組は終わった。キャスターはこの後、渋谷の爆破事件についてのニュース解説を行うと予告し、コマーシャルの放映が始まった。

早瀬由美からテレパシーの通信が届いた。

「あなたが全ての失踪事件を解決したのね。素晴らしいわ。キャスターは、わたくしも失踪中意識が無かったって言っていたけど、あれは間違いね」

賢もそれに応答した。

「今は、あの放送のようによしておいた方がいいよ。視聴者はみんな不思議だと感じているだけだろうから」

「そうね・・・あなただけが分かってくれているのね。わたし、あなたと一緒にいたいわ」

「また会おう。今日はこのままお休み」

「分かったわ。お休みなさい」

祐子が言った。

「あなた、どうしたの？ぼーっとしているようで」

「ああ、一寸別のことを考えていたんだ。ところで、この後渋谷の爆破事件について放送があるんだろう。見てみよう」

「そうね。危ないところだったものね。あなた、失踪事件で警察はあなたのことを意識しているでしょう。今度の爆破事件の後、一度渋谷警察署に連れて行かれて取り調べを受けた時、そのことは言われなかったの？」

「彼等は俺を爆破事件の容疑者として見ていただろう、だから過去の犯罪者や容疑者との関連は調べたかも知れないけど、おれが失踪事件の容疑者にはなっていないから、多分失踪事件との繋がりにまでは気が廻っていないかったんだと思うよ」

「きっとそうね」

「お姉さまも、賢さんも、お怪我が無くてほんとうによかったですね」
コマーシャルが終わり、爆破事件の解説が始まった。

「1週間前に発生した渋谷での爆破事件について、犯人像と爆破の目的について、当番組が独自の観点から検討を進めてみました。今日はテロなどの過激派の行動に詳しい評論家の外橋卓也さんにいらして頂いております。外橋さん、本日はお越し頂きありがとうございます。早速です

が、渋谷の爆発事件について外橋さんのご意見をお伺いしたいのですが」
「はい、わたくしは初めこの爆破事件は中東ゲリラの犯行ではないかと考えました。確かに、爆弾は彼らが普通用いる方法とは別の方法で作られています、彼らの組織は世界中に広がっていますから、日本で入手できる材料で爆弾を作成したということも考えられるからです。日本のあまりにもアメリカ寄りの政治姿勢に対して、彼らが反発を示したものと考えました。しかし、現場が渋谷の路地を入った所ということと、爆発がレストランの入り口付近で起きていること、特定のふたりの人が被害を受けたことを考えると、この爆発は特定の人間に対する攻撃である可能性の方が高いと考えるようになりました。もし、日本政府に対する反発の意志を表明するのであれば、もっと公共性の高い場所、例えば駅とか、劇場とか、人の集まるところを狙うでしょうし、事後に犯行声明を出すはずですが。これまで中東のゲリラが他国の政府に対する抗議を示す為に爆発を凶った場所を調べてみると、ほとんどが大勢の民衆が集まる場所です。今回の爆発の現場はレストランで、被害者が若い一組のカップルです。それに爆発の規模も、ビル全体を爆破させるような大きなものではなく、ある空間を破壊する目的で仕掛けられたように見えます。以上のことから、これは特定の組織か又は人物を狙った攻撃であると思われるのです」

「外橋さんのご意見をまとめますと、今回の爆発は特定の人か、組織を狙った攻撃である可能性が高いということですね」

「そういうことですね」

「ということは、この爆発で亡くなったお二人か、あるいはあのレストランが標的になったということでしょうか」

「わたくしの見方は、亡くなったおふたりが狙われたのだと思いますが、しかし必ずしも彼らが標的であったかどうかは分からないと思います。渋谷にはあのようなカップルは一杯いますから、標的を特定できていたかどうか疑問です。それに、亡くなられた方々には申し訳ないことですが、あの爆発を通じて特定の個人に警告をすることを目的にした可能性もあると思います。おふたりがその犠牲になってしまった可能性も否定

し難いと思います」

「現在、警察で必死に犯人を捜していますが、レストランでの目撃の他には誰も気付いた人がいないようです。これが犯人と思われる男のモニタージュです。お心当たりの方がありましたら、今画面の下に出ている電話番号にご連絡頂きたいと思います」

キャスターはスタッフが渡したモニタージュを掲げた。そのモニタージュは顔全体が髭で覆われていて、鷹のような鋭い目と高い鼻が目立っていたが、もし髭を剃ってしまったら犯人として特定できないだろうと思われた。

「さっきも君たちのお父さんから電話があって、今度の仕事はいろいろな面で攻撃の対象にされる可能性があるから、気を付けるように言われたよ。お父さんは、俺たちが狙われたかも知れないと思っているんだ。これから少し気を付けて行動しよう」

「分かったわ。亜希子さん、わたしたちもお互いに注意しましょう」

「はい、お姉様」

賢はテレビを切った。暫くして、賢はふたりを連れてアパートを出た。大通りでタクシーを拾い、ふたりを青山の家の前まで送って、ふたりが確実に門の中に姿を消すのを確認してから、自分は地下鉄でアパートに帰った。部屋に戻ってポケットからスマホを取り出すと、LEDが点滅していた。2つの着信があった。一つはゆきからで、もう一つは麻子からだった。賢は先ずゆきの家に電話を掛けた。

「賢さんですか？お元気でしょうか？」

「ゆきさん、久しぶりだね。僕は元気だよ。みなさん、お変わりありませんか」

「はい、みんな元気になっています。弟達も「賢お兄さんに会いたい会いたい」っていつも言っています。わたしも・・・わたし、大学を受験させてもらえることになったんですよ。母が、許してくださったの。母が賢さんとお話したいそうです。母に替わります」

「もしもし、孝子です。その節はいろいろお世話になりました。賢さんのおかげで、わたしたち家族も、今は穏やかな毎を送れるようになり

ました。本当にありがとうございました。実は、先日弁護士さんと一緒に法務局に行って、再審請求を出して来ました。内観さん、受理してもらえたんですよ。まだ、裁判のやり直しが決定したわけではありませんが、青森の殺人事件の犯人が捕まって、犯人に関係していた蔓木元子という女性が、警察から尋問を受けて真実を白状したようなのです。夫はきっと無実を証明することができると思います。いずれ、内観さんに報告しようと思っていましたが、先ほどテレビのドキュメンタリーを見て、直ぐに報告しなくてはと思い直しました。再審が決まったら又報告させて頂きます」

「賢さん、又お会いしたいです。もうこちらに来られることはないのでしょうか？」

「ゆきさん、その内きっと又会えるよ。だけどよかったね。大学受験頑張れよ。君のことだから必ず合格できるよ。みんな、身体に気を付けてお母さんを助けてあげてね。太郎君や信次くんによろしく。それじゃ、お休みなさい」

「お休みなさい」

賢はほっとした。ゆきの嬉しそうな顔が眼前に浮かんで来た。太郎や信次が跳ね廻っている様子が思い起こされた。賢は一呼吸置いてから麻子に電話を掛けた。

「待っていました。あなた、お変わりありませんか？」

「麻子、身体の具合はどうだ？大丈夫か？その後、どうしている？」

少しの間返答が無かった。電話の向こうで麻子が泣いている様子が手に取るように分かった。

「どうしたんだ、どこか具合が悪いのか？」

「いいえ・・・ただ・・・あなたの声を・・・聞いたら涙が流れて・・・もう、大丈夫です」

「元気なのか？今どうしている？生活は大丈夫か？」

「はい、あなたから戴いたお金が・・・まだありますから・・・」

「愛子さんは元気か？」

「はい、あの子は元気に学校に通っています。来年は3年生になれます」

から高校受験です。あの子は頭がいいから安心です。それにとってもやさしいし・・・さっきのテレビを見ました。あなた、いろいろな方を助けていらっしゃるんですね。驚きました。あなたのインタビューの声を聞いたら、もう我慢できなくなっちゃって」

「みな、失踪からの帰還に拘わった人たちの話を聞いても、君ほどに核心を突いた認識ができていないよ。君の愛に対する感覚は普通に生きている人たちの手本になるよ」

「それは、あなたに対する愛よ。わたしはそれが全てなの」

「今、働いているのか？」

「ええ、パートで働いています。1日7時間の仕事ですけど、この間生活保護の申請をして受理してもらいましたので、なんとかやってゆけそうな目処が立ちました」

「アパート代も馬鹿にならないだろう」

「ええ、でも東京や大阪のようなことはありません。安いところを借りています」

「家賃はいくらだ」

「月3万7千円です」

「風呂はあるのか？」

「お風呂は附いてないけど、1日おきに銭湯に行くわ。近くに岩出御殿という、紀州の殿様の御殿跡に作った温泉があるのよ。ずっと離れた所に幸福の湯という綺麗で大きなお風呂もあるわ。たまにはそこにも行くのよ。とても気持ちがいいわ。あなたも一度いらしたらいいわ」

「うん、是非一度行きたいな。だけど、おまえの稼ぎだけじゃ食べられないだろう。俺が半年毎に家賃を送ってやるから、無理して働くなよ」

「それは駄目よ。わたしたち、もっとしっかりしなくてはならないと思っているんだから」

「おまえの身体が健康になるまでだよ。だから、無理をしちゃ駄目だぞ」賢は麻子の右腹にあった大きな黒ずみを思い浮かべていた。そして、意識を集中し一心に麻子の身体に精気を送り、肝臓やそのほかの内臓が健康になって行く様子を思い描いた。

「今度移った場所は何処だ、一度手紙を書くよ」

麻子は初め躊躇したが、決心して自分の住所を伝えた。それは和歌山市内ではなく、隣接の岩出という和歌山線の和歌山駅から6番目の駅で降りて徒歩10分ほどの所だということだった。紀ノ川の^{ほとり}辺だ。愛子が紀ノ川が好きだからだと賢は思った。電話を切ると賢は急に眠気に襲われ、ソファの上に横になってそのまま寝入ってしまった。

岩出+

朝目が覚めたが、何かが意識に引っ掛かっている。自分を内省してみた。引っ掛かっているのは麻子のことだった。麻子に気を送った時から、自分の意識がスムーズに働かなくなってきたと気付いた。賢は麻子に何かあると察し、直ぐに昨日掛かって来た番号に電話した。しかし誰も出なかった。直ぐに電話局に問い合わせしてみた。麻子の電話番号に間違い無い。賢は麻子と愛子のことが気になった。顔を洗い身支度を調べ、衣類をトラベルバッグに押し込むとアパートを飛び出した。直ぐに地下鉄に乗り東京駅に出て、そこから新幹線で大阪まで行き、和歌山を経て岩出に出ることにした。昨日麻子から聞いた住所だけが頼りだった。電車の中で賢は麻子の健康をひたすら祈り続けた。

岩出の駅に着いたのは午後1時40分を回った頃だった。賢は行き交う人に聞きながら漸くアパートに辿り着いた。2階建ての古いアパートだった。麻子が言った203号室は2階の真ん中の部屋だった。入り口に生島麻子・愛子という手書きの貼り紙がしてある。賢はここに違いないと思い扉をノックしたが、何の応答も無い。少し間隔を開けて再びノックしてみたが、やはり応答が無い。ドアノブを握り回してみると鍵が掛けてなくすとドアが開いた。部屋は薄暗く、カーテンを引いてあるようだった。上がり口に石油の赤いプラスチック容器が置いてある。一部屋のアパートだった。部屋の中央に布団が敷いてあり、そこに誰かが横たわっている。入り口の石油のプラスチック容器に少し躓きながら部屋に上がってみると、それは麻子だった。賢は麻子の側に駆け寄って座った。

「麻子、どうしたんだ。しっかりしろ」

青白い顔の麻子がうっすらと目を開けた。賢の姿を見ると麻子の目から涙が流れ落ちた。

「あなた、来てくれたの？わたしは大丈夫なのに」

「大丈夫なもんか、どこが悪いんだ!？」

「大丈夫よ」

賢は掛け布団を剥ぎ、麻子のパジャマの上から、腹部を静かに擦った。熱はないようだが、右腹に硬いしこりがある。賢がそこに掌を当てると、麻子は苦しげな表情をした。

「いつからだ。こんなになってしまって・・・」

「大丈夫よ」

「大丈夫なもんか。取り敢えずお前の肝臓にエネルギーを送るから、その後で直ぐ病院に行こう」

「でも、お金が無いもの」

賢は「しまった」と思った。もっと金を送るべきだったと思った。

「何故、おれに言ってこなかったんだ。金なんてどうにでもなるのに」

「あなたに戴いたお金があるのよ。でもそれは大切なお金だから、本当に困った時にだけ使っていたの」

「馬鹿だな。いいか、今からふたりで奈良に行った時のことを思い出して、安らいだ気持ちになるんだ。いいか、俺がお前の病気を治すから、いいな」

賢はパジャマの中に手を入れて、直接肝臓の上に掌を当てた。麻子は黙って頷いて目を瞑った。瞑った目から涙が溢れ出してきた。そして、その顔からは次第に苦しみの表情が消えていった。賢は意識を集中した。麻子の肝臓の細胞が正常に機能し始める様子を思い描いて、自分の頭上から宇宙のエネルギーが供給され、それが今右手で触れている麻子の右腹の皮膚を抜けて肝臓に注がれているところをビジョン化した。賢は思考を止め、無心でエネルギーを注ぎ続けた。麻子の顔に赤味が差してきた。1時間ほどして、賢は瞑想状態を解いた。賢の額から汗が滴り落ちた。賢は深呼吸を一つして、エネルギーの注入を止めた。掌を動かして

みると、さっきの盛り上がるほど固くなっていた肝臓が大分柔らかな感じになって来たのが分かった。

「あなた、苦しくなくなりました。痛みも取れました」

そう言うと、麻子はゆっくり身体を起こした。賢は麻子の背後から身体を抱きかかえるようにして、肝臓の上に手を置いた状態を保った。麻子は目を瞑って頭を賢の左肩に預けた。ふたりは暫くじっとしていた。突然扉を開ける音がして、「おかあさん、ただいま」と言いながら、愛子が飛び込んで来た。

「おかあ・・・・・・・・」

愛子は賢が麻子を背後から抱いているのを見て言葉に詰まり、暫くドアも閉めず入り口に佇んでいたが、やがてゆっくり振り返ってドアを閉めた。

「愛子お帰り！どうしたの？早いじゃないの」

麻子は賢に身を任せたまま、顔だけ上げて愛子に視線を投げ掛けた。

「内観さんが、お母さんのことを心配して、はるばる東京からいらしてくださいましたのよ」

愛子は賢が麻子を抱きかかえているのを不自然に感じて、視線を外しながら言った。

「内観さん、こんにちは！やっぱりいらしてくれましたね・・・・・・・・おかあさんのことがわたし心配で、早引きして来たのよ」

「もう、大丈夫よ。痛みもなくなったわ」

「愛子さん、突然おじゃましてごめんね。昨日、テレビのドキュメンタリーが終わった後で、お母さんと電話で話したんだけど、声に元気が無かったので今朝急いで来たんだ」

賢は静かに麻子の腹部から手を離し、麻子の身体から離れた。賢はそれまで意識していなかった部屋の中を見回してみた。小さな流し台にトイレと1間の押し入れの附いた8畳ほどの1Kのアパートだった。部屋の隅に20インチほどの古いテレビが置いてある。部屋の中にはテレビと、石油ストーブそしてその横に置いてある段ボール箱の他には何も無かった。段ボール箱の上には1枚のベニヤ板が敷かれていて、その上に数冊

の教科書が置いてある。

「これからお母さんを連れて病院に行こうと思うんだけど、一緒に来てくれるね」

「勿論です。でも、お金が……」

愛子はそう答えると、部屋の奥に入って来て鞆を段ボール箱の横にそっと置いた。

「そんな心配はしなくてもいいよ。兎に角支度をして」

3人はタクシーに乗り込んだ。賢は総合病院に行きたかったが、麻子が午後の受付時間は過ぎていると言うので、仕方なく内科の個人医院に行くことにした。麻子が受付の看護婦に「保険証は持っていません」と言うと「支払いはどうされますか」と聞かれた。賢が「支払いは現金でします」と応えると、看護婦は「何故国民健康保険に加入されないのですか？」と聞いた。「麻子は生活保護を受けています」と言うと、看護婦は「それでしたら費用は免除されます」と応えた。麻子と愛子はほっとして胸をなで下ろした。

4、5人の診察が済むまで30分ほど掛かった。漸く麻子が看護婦に呼ばれ、愛子と一緒に診察室に入った。診察と検査で1時間ほど掛かった。愛子が賢を呼びに来た。医師は40代後半の男性だった。

「ご主人、奥さんは肝臓の機能がかなり弱っているようです。うちには内臓を断面観察できるCTという装置がありませんから何とも言えませんが、血液検査の結果では、肝臓の組織の崩壊を表すGOTの値が正常値の5倍近い値を示しています。GPTの値も正常値の3倍ほどです。これは一般に肝臓に何らかの障害があることを示しています。それにPT値という肝機能の状態を示す数値も正常値の半分ほどしかありません。顔などに何か変わった症状が出ていませんか？」

「はい、2、3日前に顔が黄土色になりました。それも暫くして消えましたが、身体がだるくて微熱があり、ほとんど食欲もありませんでした。この右側が固く腫れ上がったようになっていました。今は収まりましたが、昨日まではそんな状態でした」

麻子は賢が介抱してくれたことは言わなかった。言わない方がいいと思

った。賢もそう感じていた。

「やはり、かなり悪い状態ですね。明日一番で総合病院に行ってください。必ず行ってくださいね。総合病院にはCTもありますから、詳しい状態が分かります。わたくしが紹介状を書きましょう」

「ありがとうございます」

「今日は取り敢えず肝機能を向上させる薬と痛み止めを出しておきます。でもこれは急場凌ぎですから、明日必ず総合病院で検査を受けてください」

「分かりました」

3人は医院の隣にある薬局に寄って薬を受け取り、タクシーで一旦アパートに戻った。麻子に直ぐにパジャマに着替えて床に着くように言うと、賢は一旦部屋の外に出てスマホで祐子と亜希子にメールを入れ、それから藤代肇に電話を掛けた。

「どうしても緊急で助けたい人がいる為、もしかすると正月の会議に出席できないかもしれません。申し訳ありません」

「分かった。君の就業は4月1日からだから、それまでにバランスを取って欲しい。正月は君がいなくても何とかなるだろう。しかし、今の緊急対応に目処が立ったら、直ぐに連絡してくれないか。もし問題が解決したら正月明けの8日に会社に顔を出してくれ。あくまで問題が解決してからでいいからな」

「申し訳ありません」

祐子と亜希子のふたりには「暫く戻れない。信州への旅行は延期にさせてくれ。詳細は戻ったら話す。スマホの電源はOFFしておく」という全く事務的な内容の同じメールを送った。楠木と田辺のスマホには打ち合わせキャンセルのメールを送った。それから由美とのテレパシーのチャンネルを切ることを意識した。一連の処置が済むと、賢は意識を麻子の居るこの空間に固定した。そして部屋に戻ると、愛子に向かって言った。

「いつも、夕飯はどうしているの？」

「お母さんが作ってくれます。お母さんが忙しいときはわたしが作りま

す」

「今日は、愛子さんが準備してくれるかな。まず買い物をして来て。今日はお寿司にしよう。愛子さん、買い物から帰ったら、お吸い物を作ってくれるかな。一緒に行きたいけど、お母さんの近くにいてあげたいから頼むね。スーパーでお寿司の上を3人前と、マグロの中トロの刺身、それから・・・明日の朝のおかずも買って来て」

「でも・・・」

「お金なら大丈夫だよ。これを持って行って」

そう言いながら賢は愛子に1万円札を2枚渡した。

「はい、あとはわたしが見計らって買って来ます」

愛子は嬉しそうに流し台の下の引き出しから、スーパーのポイントカードを取り出し、布の袋を手にするると急いで部屋を出て行った。賢はパジャマに着替え横になっている麻子の右側に座り、布団の間から手を挿入した。パジャマの中に手を入れ、肝臓の上を軽く撫でた。肝臓の周りがまた少し膨らみ、固く感じられた。先ほどと同じように賢は麻子にふたりきりで過ごした喜びの中にいた時のことを思い出させ、自分は麻子の肝機能が改善してゆく様子を頭の中でビジョン化し、宇宙のプラナー(気エネルギー)が頭上から流入し、掌を通して麻子の体の中に流入してゆく様子を見つめながら瞑想状態に入った。ふたりは完全に時間経過の無い状態になった。麻子の身体中の血の流れが、賢にははっきり感じ取れるようになってきた。肝臓はもとの機能を取り戻す動きを加速させている。麻子の身体が暖かくなってきた。麻子は突然床から起きあがり、賢にかじり付いた。

「あなた。強く抱き締めて」

麻子の心臓が激しく脈打っているのが感じられた。賢は麻子を強く抱き締めて、口づけをした。麻子は目に一杯涙を溜めて、賢を見つめた。賢は麻子をそっと元のように床に就けて、再び肝臓の上に手を翳し軽く擦った。肌は温かく、肝臓が力強く活動を始めている様子が掌から伝わってくる。壊れ掛けていた肝細胞が次々に再生してゆく映像がビジュアル化された。肝臓は巨大な組織だった。肝小葉と呼ばれる1ミリほどの組

織がびっしりと詰まっている。その一つ一つの組織の活動が活発になってきているのを感じた。

「今、君の肝臓は自己修復を始めた。もう大丈夫だ。1時間もあれば完全に元に戻るだろう。暫くこのままでいよう」

ふたりは再び瞑目した。愛子がい買い物に出掛けて50分ほどが経過した。

「ただいま」

愛子の元気な声がした。

「おかえり」

賢と麻子が同時に応答した。愛子は布袋を大事そうに抱えて部屋に入ると直ぐに、横になっている麻子の右側に来て座った。賢は麻子の腹部に置いている手を動かさず、麻子の方に屈み込むようにしながら、愛子を見た。麻子も愛子の方に顔を向けた。

「お寿司、上を買って来たわ。高かったわよ。1パック1800円もしたの。いつものスーパーには上は無かったのよ。だからプレミアムシェイのスーパーまで行って来たの」

そう言いながら、布袋から寿司の詰め合わせパックを3つ出して見せた。

「ほら、お母さんの好きなトロもあるし、イクラもあるし、ウニもあるのよ。わたしもイクラとウニが大好き。ずっと食べてないでしょ。ほうら美味しそうでしょ」

「お母さんはね、賢さんがあなたを呼び戻す為に来てくださった時、ご馳走になったわよ」

「おかあさんだけ、いいな！ねえ、これおいしそうでしょう。それから、これ中トロよ。これだけで1500円もしたのよ。これでも、一番小さいのよ。他のは3000円とかするの。あんなの買う人がいるのかしら」

「愛子さん、もっと大きいのを買って来ればよかったのに」

「わたしはお寿司の詰め合わせだけで十分よ。他には何も要らないのよ。そう、賢さんがおまえに明日のおかずも買うように仰ったでしょう。何を買ったの？」

「うん、納豆とネギとお豆腐を買って来たわ。澄まし汁はお豆腐の汁でいいかしら」

「愛子さんの好きな具を買って来ればよかったのに」

「いいえ、こんなに一杯買っちゃって、全部で7400円にもなってしまいました。わたし、スーパーでこんなに買ったのは生まれて初めてです」

そう言いながら、愛子はレシートと残金を賢に差し出した。

「愛子さん、それ持っていて。今、お母さんの肝臓にエネルギーを送っているから。あと20分はこのまま続けたいからね。20分したら夕飯にしよう」

「はい、わたし澄まし汁を作ります」

愛子は抱えるように寿司と刺身のパックを持って流し台の所に行き、台の上に4つ並べて置いた。それから流しの下扉を開けて、まな板と包丁を取り出し豆腐を角切りにしてから、ネギを刻み始めた。汁を作り終わるとやかんで湯を沸かし、目にも留まらぬ早さで茶筒から粉茶を急須に入れて湯を注いだ。その手際の良さに賢は心地よい安堵感を覚えた。

「出来たわ。あっ、まだ7分あるわね」

そう言いながら、愛子は段ボール箱を重そうに引っ張って部屋の中央付近に持って来た。中にはどうやら本が入っているようだ。愛子は布巾でベニヤ板の化粧板を拭き、そこに麻子と自分の箸、袋の中から割り箸を取り出して並べた。それから2つの碗に澄まし汁を注ぎ、麻子の場所と割り箸のある賢の場所に置いた。自分の分は茶碗に注いで持って来て並べた。寿司のパックは蓋を開け、小皿に醤油を注いでひと組みずつ運んできた。刺身のパックには大根のツマが敷いてあったので、刺身を取り出し斜めに切って、またパックに戻して持って来た。

「さあ、支度が出来ました。丁度20分経ったわ」

賢が麻子の背を抱きかかえるようにして、起き上がらせた。愛子は目を逸らせていた。麻子は立ち上がって流し台に行き手を洗った。賢は布団を壁際までずらして段ボール箱の周りに座れる空間を作った。それから麻子の所に行って手を洗った。麻子がタオル掛けからハンドタオルを取って賢が手を洗い終わるのを待って渡した。賢が手を拭いて麻子に返すと、麻子は自分の手を拭いてそれをパジャマのポケットに入れた。

「ありがとう・・・愛子さん、すっかりお母さんの代役をこなしているね。しっかりしていて、お母さんも幸せだ」

「そうなの。わたし、この子が居るから何も心配いらなのよ。これであなたがいらしてくれたら・・・」

「おかあさん、そんな我が儘を言ったら内観さんに申し訳ないわ」

「はっはっは、それじゃいただくか」

「いただきます」

3人で声を合わせて言った。愛子と麻子はトロやイクラ、ウニといった好物の寿司を残して、初めに海苔巻きや卵焼きを食べた。

「母から毎日内観さんのお話を聞かされています。一度、直接お話ししたかったです。わたしとても緊張しています」

「どうして？」

「だって、内観さんはわたしとお母さんを救ってくださった命の恩人なんですもの。いらっしゃるだけで緊張します」

「ぼくはそんな立派な人間じゃないよ。お母さんが美人だから守ってあげたくなっただよ」

「まあ、賢さんたらそんなこと仰って」

麻子の顔が赤くなった。

「とってもおいしいわ」

麻子はマグロの刺身を食べながら話を逸らすように言った。

「わたしが失踪から戻ることができた時、おかあさんは内観さんと一緒に居たんでしょう」

「どうして知っているんだい？」

「おかあさんが言いました。内観さんが世界中で一番優しい人だって。

「わたしが本当に困った時はいつでも飛んで来てくれるのよ」って」

「愛子、わたし・・・そんなこと・・・」

麻子は顔を真っ赤にして下を向いた。賢の目にはそんな麻子がとても初^う心に映った。

「でも、おかあさん、昨日の夕方から急に具合が悪くなったでしょう。だからわたし、内観さんが本当に飛んで来るかしらって思っていたんで

す。そしたら本当に来ちゃって、ビックリしました」

「おかあさんは、もっと前から苦しかったと思うよ。肝臓が随分弱っているようだから。それでね、愛子さん、ひとつ頼みがあるんだけど、僕を暫くここに泊めてくれないかな？お母さんの肝臓が元気になるまで暫く一緒に居たいんだ。きっと治してみせるから」

「こんな狭いところがかまわなければ、歓迎します。一寸恥ずかしいけれど」

「ホテルに泊まることも考えたけど、夜も一緒に居たいんだ。ずっとお母さんの側に居てあげたい」

麻子はうつむき加減に、先ほどのハンドタオルを取り出し涙を拭った。

「愛子、ウニとイクラをあげるわ。あなた好物でしょ」

「うわぁ、本当！ありがとう！」

それから15分間ほど、3人は食事を楽しんだ。麻子は寿司を半分ほどしか食べることができなかった。残りは愛子が喜んで食べた。食事が済むと愛子は後片付けをし、段ボール箱を元の位置に戻した。賢は布団を壁から引き戻して、麻子に横になるように促した。麻子が愛子に銭湯に行くように言うと、愛子は直ぐに押し入れの中から洗面器を取り出し、石鹸を包んだタオルの中に入れて出掛けた。愛子が出掛けると麻子は身体を起こした。

「あなた……この間のように抱きしめて……」

賢は麻子のパジャマの下に手を入れて、肝臓の上を軽く擦ってみた。腫れはなくなっていた。

「痛くないか？違和感はないか？」

「ううん、全然……ねえ……」

麻子はパジャマの中に入れていた賢の手を握り、身を擦り寄せた。

「寒くないか？」

「ううん、熱いほどよ。分かるでしょう。こんなにどきどきしているわ」二人は暫く抱き合ったままでいた。その時いきなり入り口のドアが開いた。麻子のはっとした。愛子だった。賢はそのまま動こうとしなかった。愛子は入り口に佇んで、布団の中で抱き合っている二人を呆然として見

つめた。

「今日は・・・お風呂・・・お休みだったの？」

麻子は蚊の泣くような声で聞いた。

愛子はドアを閉めて部屋の中に入ると、流し台の方に身体を向け、ふたりが目に入らないような体勢をとった。

賢はそのまま、身体を動かさずに言った。

「愛子さん、こんな所を見せてしまって、ごめんね」

「・・・わたし、前から知ってる」

賢は麻子の額に口づけをして、静かに離れた。

「愛子ごめんね。おかあさん、この方を愛しているの」

「うん、分かってる。でも、できるだけわたしに分からないようにしてね。わたし、心臓が飛び出すほどドキドキしている」

愛子は顔が紅潮しているのを意識した。心臓は早鐘のように脈打っている。

「不注意だった。入り口の鍵を掛ければよかった」

賢は麻子にだけ聞き取れるような小さな声で言った。

「わたし、宿題やる」

そう言うと、愛子は角の段ボール箱の所に行って鞆から教科書を取り出し黙読し始めた。賢は麻子を床に就かせてその右側に座った。布団の間から手を入れ、パジャマを上げて肝臓の辺りに手を当ててみた。肝臓の活動は安定している。心臓からの血液の脈動が響いてくるようだった。賢はそっと麻子の心臓の上に手を置いた。暫くの間激しい鼓動が続いていたが、それも次第に収まってきた。賢は手を肝臓の上に戻した。肝臓の息づいた様子が頭の中にビジョン化された。

「肝臓が弱っているのは、肝臓だけが原因じゃなくて、身体全体の健康状態と心のバランスが影響しているんだ。肝臓は身体全体を健康に保つ役割を担っているんだ。現在分かっているだけで、500以上の機能があるんだ。だから、僕が暫く一緒に居て、君が身体全体のバランスを取り戻せるようにやってみるよ。身も心もな」

「うれしい」

麻子は小さな声で囁くと、賢の右腕を握った。

「からだが不調になるのは、何か心配事でもあるのか？」

「*****」

「辛いこととか、あるんじゃないか？」

「・・・あなたが帰ってしまってから・・・わたし、淋しくて」

話を聞いていたのか、愛子が振り返って言った。

「わたしが居るじゃない。おかあさんしっかりしてよ」

「そうよ、お前が居るからわたしは生きてゆけるのよ」

「麻子、4月に仕事に就けたら、きみと愛子さんをきちんと扶養しようと思う。俺が君の夫の代わりになり、愛子、これから愛子って呼び捨てにするよ。お前の父親の代わりをしようということだ。そしたら、君たちにこんな苦しい生活をさせなくて済むし、たまにはどこかに連れて行ってもやれるしな」

「あなた・・・・・・・・・・うっ・・・・・・・・うっ」

麻子は床の中で掛布団に顔を埋めて泣き声を押さえた。麻子は激しく啜り上げて泣いた。賢はポケットからハンカチを取り出して、掛布団を持ち上げ、身体を丸めて泣き崩れている麻子のまぶたを拭いてやった。賢は愛子の方を向いて言った。

「愛子、正月休みに3人でUSJにでも行こうか？初詣をしてから」

「えっ、ほんとう!? うれしい!お母さん、ねえ、連れて行ってもらおうよ」

「まあ、この子ったら、喜んじゃって」

「勿論、君が回復していたらの話だよ。明日総合病院に行って診てもらって、その時先生に聞いてみよう」

賢は自分の言ったことが祐子や亜希子を欺く結果になるかも知れないということにまで思考が及ばなかった。愛する麻子と愛子を救わなくてはならないという切羽詰まった危機感が、賢をこの刹那に生きさせていた。麻子は身体を賢の方に向け、賢の膝の上に手を置いた。賢はその手を軽く握った。それから暫くの間愛子は宿題に集中し、賢と麻子は黙って瞑目していたが、愛子は宿題を終えると自分用の布団を麻子の布団の横に

並べて敷いた。愛子の希望で、賢は二人の間の布団と布団の境目に寝ることになった。賢用の掛け布団は無かった。押し入れから麻子のコートを取り出して、着の身着のまま横たわり、身体の上にそのコートを被せて寝た。賢は麻子の方に身体を向けて、右腹に右手を載せて祈りながら寝た。麻子は賢の左手を握っている。賢は夜半に、背中に暖かさを感じて目を覚ました。愛子だった。寝返りを打って賢の背中に張り付くようにしている。賢はそのまま身体を動かさないようにしていた。麻子はぐっすり寝入っていた。愛子が聞こえるか聞こえないような声で囁いている。

「内観さん、だぁーいすき」

賢は愛子の方に身体を向け直して、黙ってそっと愛子を抱きしめてあげた。愛子は眠れないでいたのだ。賢は愛子の髪を優しく撫でてやった。眼鏡を外した愛子の顔は幼い少女を思わせた。愛子にはっこり微笑んで、反対側に寝返りを打った。すぐに愛子の寝息が聞こえてきた。愛子は無垢な意識のまま成長していた。翌朝賢が目を覚ますと麻子が朝食の支度をしていた。

「おはよう！身体の具合はどうだ？」

「おはようございます。もう、すっかりいいわ。あなた、ありがとうございます」

その声で、愛子が目を覚ました。

「おはよう！」

賢が愛子の方を向いて言った。愛子は少し恥ずかしそうに返事をした。

「おはようございます」

賢が起きあがると、愛子が二人分の布団を畳んで押し入れの下段に入れ、賢が手渡した麻子のコートも受け取って押し入れの中に打ち付けた釘に下げたハンガーに掛けた。愛子は段ボール箱を引きずって部屋の真ん中に持って来ると、流し台から布巾を持って来て、ベニヤの化粧板の上を拭いた。麻子がベニヤ板の上に食事を用意した。賢と愛子は流し台の所に行って顔を洗い口を濯いだ。愛子が賢の洗い終わるのを待っていてタオルを渡した。賢はそれで顔を拭いて愛子に返した。愛子は自分も

顔を洗い口を漱ぐと、その同じタオルで何のためらいもなく顔を拭いそのタオルを流し台の横のタオル掛けに戻した。それから鞆の中から眼鏡を取り出して掛けた。

「愛子、新しい学校には慣れたか？」

「うん、初めはみんなが意識していたみたいだけど、直ぐに仲良くなれたわ。わたしテレビに出たでしょう。だから一寸した有名人なのよ」

「この子、1年遅れた所為もあるけど、この間のテストで学年トップの成績だったのよ。だから、^{いじ}虐められたりはしないはずよ。さあ、いただきますしょう」

3人は朝食を摂った。炊きたての御飯に納豆とみそ汁、漬け物、卵焼き、海苔が用意されていた。賢はやはり主婦だと思った。手作りの味噌汁は久し振りに口にすると懐かしいような味だった。食事を済ますと、愛子が直ぐに学校に出掛けた。麻子と賢が入り口で愛子を見送った。麻子が今日は早引きしないように言った。愛子はにこにこしながら元気よく出掛けた。愛子の姿が見えなくなってから扉を閉め、ロックすると、麻子が賢に抱きついた。賢は麻子をきつく抱きしめて、口づけした。賢はかじり付いてくる麻子を引き離して言った。

「今日は、早くに総合病院に行こう。お前の身体が回復しているかどうか、他に悪いところはないか確かめなくてはな」

「わたし、お湯を湧かすわ。身体を拭かなくては」

「背中俺が拭いてやるよ」

麻子はヤカンに水を一杯満たしコンロに掛けた。賢はストーブに火を付けた。部屋の中が次第に暖まって来た。麻子は押し入れの中の段ボール箱から下着とタオルを取り出して畳の上に置いた。ヤカンから蒸気が噴き出してくると、麻子はガスコンロを止めてから、押し入れの隅に行き賢に背を向けて衣類を脱ぎ一糸まとわぬ姿になった。賢は部屋のカーテンが引かれていることを見てホッとした。

「少し身体を見せてみろよ」

賢はそう言うと、麻子に近づき背後を首筋から足の先まで確認した。それからぐるりと回して前を向かせた。麻子は恥ずかしさに両手で顔を覆

った。賢はかまわずに顔を覆っている両手から、肩、胸、腹、腰、両足までチェックをした。以前あった打撲の傷跡は全く無くなっていてきれいな肌に戻っていた。

「大丈夫そうだ。もう痣は完全に消えているな」

麻子は恥ずかしそうに両手で前を隠してじっと立っていた。賢は流し台に立ちヤカンの湯を洗面器に注ぎ水で薄めた。さっき麻子が出したタオルを湯に浸けるとそれを絞って戻り、放心状態の麻子の背中を丁寧に拭いた。麻子は初めにタオルが触れたときぴくとしたが、賢が背を拭いている間まんじりともせずにはいた。

「あなた・・・・・・・・わたし・・・・・・・・」

背を拭われながら、麻子は涙を流した。賢はタオルを濯いで麻子に渡した。

「あなた・・・・・・・・ありがとう」

麻子はタオルを受け取って身体の前を拭った。うれしさと恥ずかしさで言葉が見つからないようだった。だからといって言葉を探しているようでもなかった。ただ、賢を呼んでいるだけだった。

「あなた・・・・・・・・」

そういいながら、麻子は賢にしがみ付いた。賢はタオルを畳の上に置いて、そっと麻子を抱きしめ頭を撫でた。

「どこにも行かないで！どこにも行かないで、ね！約束して、ね！」

「うん、どこにも行かないよ」

二人は開院30分前に総合病院の受付に並んだ。既に3人の高齢な患者が並んでいた。受付が開始されると直ぐに賢は昨日受け取った内科医の紹介状を提出した。麻子の受診は早かった。2番目だった。賢も診察に立ち会った。医師は50歳前後の色の浅黒い落ち着いた感じのする男性だった。麻子は症状を的確に説明した。医師は聴診器で麻子の上半身を調べてから言った。

「紹介状にあるような症状は見られませんが、念の為にレントゲン、CT、血液検査、尿検査をしてみましょう。昨日山田医院で受診した後で何かありましたか？」

賢は瞑想をしたと言った。瞑想の後でその凝りが消えたと言明した。

「そんなことはありませんね。何か別の原因で、一時的に凝りが軟らかくなっているのでしょうか。兎に角検査の結果を見ましょう。検査結果が出たら詳しく説明します」

看護婦に案内されて、それぞれの検査室を廻った。どの検査室も既に混み始めていて、指定された検査を全て終えるのに1時間半ほど掛かった。その間、賢が常に麻子の側に付き添って優しく世話をした。検査を終えるとふたりは内科の医師の元に戻り、大勢の受診者の中で順番を待った。30分ほど待って麻子が呼ばれた。賢も一緒に診察室に入った。

「結果が出ました。CTとレントゲンの検査結果からは、患者さんの身体には特に異常は認められませんでした。ただ、山田医院の指摘しているように、GOTとGPTは高めの数字を示していますが、肝機能障害を示すほどの値ではありません。山田先生の見立ての通りだとすると、どうして1日でこんなに変わったのか不思議です。瞑想の効果ですかね・・・だから、普通の生活をして大丈夫だと思いますよ」

そう言うと、医師は皮肉笑いを浮かべた。ふたりは医師に礼を言って診察室を出た。受付は人で溢れていた。賢は麻子の手を引いて病院を出た。

「よかったな。君の内臓が俺たちの祈りに同調してくれたんだよ」

「あなた・・・」

麻子は歩きながら囁くように言った。賢を見つめる目が潤んでいた。既に12時近くになっている。

「どこかで食事をするか？」

「いいえ、何か食べ物を買って帰って、家であなたとふたり切りでいただきますわ」

ふたりは途中ベーカリーに寄り暖かいパンを買った。麻子は愛子の分もと言って菓子パンを3つ買った。ベーカリーを出ると直ぐ近くのスーパーに寄り、野菜類や惣菜そして肉を買った。全て愛子の好みに合わせた買い物ようだった。麻子は賢に、何が好きかと何度も聞いた。賢は聞かれる度にピザが好物だと言った。麻子は「今夜はこれにしましょう」と言って、冷凍ピザを2枚買った。ふたりがアパートの部屋に戻ったの

は1時過ぎだった。部屋に入るとストーブに火を付けてから麻子は直ぐに昼食の支度を始めた。野菜炒めと、コンソメスープにパンを添えて段ボール箱の食卓に並べた。ふたりは向かい合って座り、目を瞑って無言で感謝の祈りを捧げた。賢が目を開けると、麻子が賢をじっと見つめていた。ふたりは微笑みを交わして食事を始めた。食事を終えると麻子が茶を入れた。茶は朝の出廻らしだったのでほとんど香りが無くなっていて、白湯とさほど変わらない。ただ少し黄緑色が付いていて、窓から僅かに入って来る光を映すと、茶を口にした時に味わえる寛いだ雰囲気が感じられた。暫くして麻子は食卓を片付けた。賢は段ボール箱を部屋の隅に戻した。窓から見える外の景色は無い。隣の2階建ての家の壁が見えるだけで、遠くから見るとアパートの屋根は隣の家の屋根とほとんどぶつかっているのではないかと思われるほど接近していたが、それでもその間隙から僅かに光が差し込んで来ていた。だから昼間の部屋は明るかったが、夕方近くになると直ぐに薄暗くなってしまった。食器類の汚れを落とし、それを流し台の前のプラスチックの籠の中に並べると、麻子は手を拭ってから賢の元に戻って来た。

「食事をして、お腹は痛まないか？」

「はい・・・すこし右の上の方に圧迫感がありますけど」

賢は麻子を促して畳の上に座らせ、自分が背後に回った。賢が肩に手を載せると、麻子は背を賢の胸に凭れ掛けて来た。

「寒くないか？」

「ううん、あなたの身体、暖かいわ」

「暫く、肝臓にエネルギーを送るから、肝臓が元気に働いているところをイメージして、そのままじっと瞑想しているんだよ。わかるね」

「はい」

賢は背後から麻子を抱き抱えるようにして、右手を廻して麻子の下着の中に差し込み肝臓の上に掌を当てた。そして、左手で麻子の左手を軽く握った。賢は左手を通じて、自分と麻子が一体になっていることをイメージした。自分の頭上から宇宙のエネルギーが流れ込んで来るイメージを描き、それが自分の右手を抜けて麻子の肝臓に注がれているところを

額の内側に描写した。麻子は初め、自分の肝臓が次第に回復してゆくところをイメージしようと努力していたが、やがて、賢の掌が軟らかく純白な羽毛の玉のように感じてきて、そこから滋養が流れ込んで来るのを感じ始めた。それは自分が意図して感じようとしていた感覚とは異なり、周りから真綿に包まれているような優しい、柔らかな感覚だった。暫くするとその感覚が全身に広がって行き、得も言えぬ心地よさに包まれてきた。賢は意識の集中を切らさずにエネルギーの注入を続けた。まるで、自分が給湯管になったような感覚だった。頭頂ひやくえの百会から流れ込んで来たエネルギーが身体の中を流れて、右手の勞宮ろうきゆうから吹き出して行くようだった。麻子はいつしか眠りに落ちていった。朦朧とした意識の中で、自分の肝臓が活発に活動している様子が分かった。肝臓はさながら巨大な工場のようなようだった。心臓から送り込まれた血液が流れ込み、全ての肝小葉が活性化して、オートメーションのマシンの様に規則正しく動いていた。肝動脈から小葉間静脈を通して流れ込んで来る血液に載って他の臓器が吸収した栄養分がどんどん運ばれて来る。肝小葉はその栄養素を取り出して加工し、再び送り出しているようだった。取り出された栄養素はいろいろな検査の過程を経ているようだった。毒性のあるものは、リゾトームの様な組織がそれを取り去っている。本当に純粋な形になった栄養素を、今度は加工過程に送り出していた。加工過程ではその栄養素が人体で活用できるような形に改造された。そして、あるものは貯蔵庫に送られ、その他のものは他の臓器に送られる為に分けられていった。また、もう一つの過程がそこでは行われていた。入って来た赤血球を検査していた。検査をパスするとそのまま中心動脈を経て肝動脈に送られ、再び体内の血液循環の過程に参加してゆくのだった。傷ついたり、壊れ掛かっている赤血球は修復が施された。どうしても修復できないものは廃棄処理の過程に送られ、その分、新しい赤血球を作成して補っていた。肝臓がこんなに凄い工場だということに麻子は驚いた。そして、自分がこれまで一顧だにしなかった内臓の機能に対して畏敬の念を抱き始めていた。麻子は肝臓のあまりの働きに驚愕し、うつらうつらした意識から覚醒した状態に戻った。麻子は首をくねらせて賢の顔を見よ

うとした。賢は半眼で初めの姿勢のまま気を送り続けている。麻子は賢の顔を見ることができなかったが、その温かい手が自分を抱きしめているのにホッとして再び頭を賢の肩に委ねた。そして、指を絡めて握りしめている左手をそのまま自分の心臓の上に持って行った。賢も意識の集中を外して、麻子の左手に意識を移した。規則正しく強い鼓動が伝わって来た。

「4時半を廻ったようだな」

日差しは全く見えなくなり、薄暗くなった部屋の中に自分の身を賢の胸に委ねていることに、深い寛ぎを感じて麻子は応えた。

「わたし、肝臓の工場を見たわ。凄いのよ。肝臓があるからわたしは生きているのね」

「肝臓だけじゃないよ。どの臓器も凄い働きをしているんだ。一つ一つ見てみると、本当に有り難くて平伏したくなるよ。自分がこんなに凄い内臓の働きで生かされていて、存在させてもらっている事を知ると、自分のあまりの不甲斐なさに申し訳なくて言葉も出ない。果たして自分はこんな風に生かしてもらえるほど価値があるのかどうか疑問になってくる」

「あなたがそんなことを仰ったら、わたしはどうすればいいの。わたしの生き方なんてとっても許されたものじゃないわ」

「いや、君も、僕も同じさ。内臓のやってくれていることの万分の1もできない。人は大抵そうさ。だから、近づくしかないんだ。全てを動かしてくださっている存在に」

「暫くこのままでいて。わたし、南国の島に行きたいの」

「ぼくも、一緒に行くよ」

ふたりは南国の孤島を冥想した。そこに幼児のように戯れている自分たちを存在させた。ぎらぎら輝く太陽の日差しを受けて、波がしぶきを輝かせながら寄せては引いて行く。孤島の砂は珊瑚の欠片で出来た砂で、目を明けていられないほど白い。ふたりは自分たちが幼児であることに何の違和感も覚えなかった。海岸を駆けるふたりは波の「ざーっ」という音に時々打ち消されながら聞こえてくる「サクッ、サクッ」という珊

珊瑚のかけらを踏む音を楽しんでいると、意識は宙に舞い、いつの間にか自分たちのいる孤島を見下ろしていた。知らない内に陽は西の水平線に近付き、黄金色に輝く波と赤く染まってゆく空を眺めながら、ふたりは砂浜に腰を下ろしている。波は静まり、今は音を立てるものは何もない。さっきまで、時々ゆるりゆるり揺れていた椰子の葉も、全く動かなくなった。ふたりは沈み行く太陽をじっと見つめた。その景色に溶け込んで風景の一部になっていった。

「ただいま！」

愛子の元気な声がした。

「どうしたの？お母さん、病院の検査、どうだった？」

二人は夢心地から醒めた。

「あら、愛子、早いじゃないの？」

「いやだ、おかあさん、もう5時過ぎよ」

「えっ？あら、南の島で、とってもきれいな夕日を見ていたのよ」

「やだ、寝てしまったのね。ねえ、病院の結果はどうだった？」

「お医者さんが、何でもないって。悪いところは何にもないって。不思議がっていたわ」

「USJ行ってもいいって？」

「あつ、聞くの忘れちゃった。でも普通の生活をして構わないってから、大丈夫よ」

「やだ、おかあさんたら、忘れん坊なんだから」

「そうだったね。安心してすっかり忘れていたわ」

「今日はクリスマスでしょう。3人でパーティしない？もう、お父さんが居ないから、クリスマスやってもいいでしょう？ねえおかあさん」
そう言えば、パン屋さんにケーキが並んでいたわね。愛子、菓子パンがあるわよ。お腹空いたでしょう。今日は夕飯、ピザよ」

「本当!?凄いわ。お母さん、ピザどうやって作るの？」

愛子は菓子パンを一つ麻子から受け取って、パクッと噛みついた。

「冷凍ピザよ。もう、解凍できていると思うから、これから焼くわ」

賢が母子の会話の間に入った。

「愛子、お母さんがピザを焼いている間に、一緒にケーキを買いに行こうか？」

「うん。わたしも、一緒に行っているの？」

「勿論さ。俺の可愛い娘じゃないか」

麻子は、ほんの少し焼き餅に似た気持ちが湧いてきたが、そんな感覚を覚えた自分を恥ずかしく感じた。

「ふたりとも、行って来て。早く帰って来てね」

賢と愛子は部屋を出て、先ほどパンを買ったベーカリーに行った。

「あのう・・・お、おとう・・・さん？・・・なんか恥ずかしいな・・・手を繋いでもいい？」

「うん」

愛子は賢が出した左手を怖いものに触れるようにそっと触れてから軽く握った。愛子の手は温かかった。愛子の頬がほんのり赤くなっているのが賢には可愛かった。まだ、小さな子供のようだった。今時分の中学生でこんなに初心^{うぶ}な心を持った娘はいるのだろうかと思った。

「わたし、やっぱり・・・おとうさんって呼べないわ。パ・・・パ・・・賢パパって呼んでもいい？」

「ああ、愛子の好きなように呼んでくれればいいよ」

ふたりは少し遠回りになるが、夕暮れの紀ノ川沿いを歩くことにした。川面を掠めて土手の上まで吹き上げて来る風が冷たかった。愛子は途中で少し止まり、紀ノ川に視線を投げた。冬の土手は草木が枯れて、寒さにじっと耐えているようだ。愛子は少し手を振りながら歩いた。賢もそれに同調した。パン屋にはクリスマス用のケーキがまだ5つほど売れ残っていた。

「あ、先ほどはどうもありがとうございます。クリスマスケーキ、お安くなっていますよ」

「3人ですから、こちらの小さいのをください」

愛子が言った。

「はい、毎度ありがとうございます。あなた、テレビに出た愛子さんでしょう？」

「はい、そうです」

「わたしはテレビを見て感動しました。うちの女房なんて、泣き出してしまいましたよ。今はこちらにいらっしゃるのですか？」

「はい、この近くのアパートに母と一緒に住んでいます。そして・・・」

「こちらがお母さんの大切な方ですか？」

店主は賢の方に会釈しながら言った。

「*****」

「あっ、立ち入ったことを言ってごめんなさい」

「構いません、僕がそうです。この子はとても素晴らしい娘で、わたしは嬉しくて。今日は3人でパーティをするんですよ」

店主は何やら袋に詰め込んでケーキと一緒に愛子に差し出しながら言った。

「30%引きで、2100円です。それから、これはわたしからの贈り物です。幸せになってくださいね」

ふたりは礼を言って店を出た。愛子はパン屋の主人に祝福されたことが嬉しくて、帰り道は時々スキップをしては立ち止まり、賢の方を振り返り、賢が近付くとまたスキップをして先に行くということを繰り返して帰った。

「ただいま」

愛子に続いて、賢が部屋に入ると、麻子が心配げな顔で言った。

「お帰り、遅かったじゃない。心配したわよ」

「うん、往きに紀ノ川の堤を遠回りしたから、少し遅くなっちゃった」

「あら、あら、仲のいいこと。ケーキはあったの？」

「まだ、5つも残っていたわ。もう遅いからかしら、3割引してくれたのよ。それに、パン屋さんの小父さん、プレゼントくれたのよ。わたしのことテレビで見たんだって」

「へえー、凄いわね。何かしら」

袋の中を覗きながら愛子が応えた。

「蠟燭、1、2、3本と、えーと、コーラが3缶と、それから、これは

クッキーの袋みたいね。あとでこのローソクが役に立つわね」

愛子はケーキの袋を流し台の脇に置き、手を洗ってからプレゼントの袋を持って、段ボール箱の座卓の席に着いた。

「そうね。でもその前にピザが冷めちゃうわよ」

ベニヤ板の上には既に焼き上がったピザが一つ、アルミホイールの上に8等分にナイフを入れて載せられていた。そして、もう一つが焼いたままの状態で流し台の横の調理台の上に載せてある。

「わあ、おかあさん、もう出来ているのね。賢パパ、早く席に着いて」
愛子は賢パパというときの抵抗感がかなり少なくなってきたことを嬉しく思いながら、流し台の麻子の近くに立って洗った手を拭いている賢に声を掛けた。賢は直ぐに、座卓の前に座った。賢が腰を下ろすと、麻子も微笑みながら直ぐに座った。

「いただきます」

3人声を合わせて言うと、愛子がパン屋からもらった袋からコーラの缶を出しながら言った。

「ピザにはコーラが合うのよ。あの小父さん、まるでわたしたちがピザをいただくのを知っていたみたい。まだ冷たいわ。暖かいお部屋で、温かいピザと冷たいコーラ。“クリスマス！”って感じね」

愛子は幼子のようにしゃいでいる。ピザはまだ温かかった。愛子と賢はよく食べたが麻子も4切れ食べた。愛子はピザにはコーラが良く合うと言っては喜んだ。食事を終えて暫くすると、愛子がお風呂に行こうと言った。3人で連れ立って出掛けることにした。今度は麻子が紀ノ川の土手を歩きたいと言い出した。右に麻子、左に愛子、賢を挟んで3人並んで歩いた。麻子は賢の右手に自分の腕を絡めて歩いた。愛子は賢の左手と自分の右手を繋いだ。辺りはすっかり暗くなってきていて、時々頬を掠める風が身震いするほど寒かった。堤から降りて車道沿いの路に出た時、賢は背後に強い視線を感じて振り返った。それは何か敵意に満ちた視線の様だった。麻子が言った。

「あなた、どうしたの？」

「いや、一寸・・・」

賢は二人の女性に恐怖感を与えてはならないと思って何も言わなかった。背後からの視線を受けている感覚は銭湯の入り口まで続いた。賢は銭湯に入る時もう一度振り返ってみたが、薄暗闇で人影は見えなかった。3人は銭湯の出口で待ち合わせた。番台には50歳を過ぎた男性がジャンパーを着て上がっていた。賢が脱衣して銭湯の中に入ると、3人の先客がいたが、いずれも60歳を超えているように見えた。賢は湯船に浸かっていつものように瞑想をした。背後から来ていた視線は明らかに自分に向けられていた。それはアパートから追って来たものではなかった。紀ノ川の堤から降りた辺りからだった。麻子と過ごした病院での一日がクリアなイメージで浮き上がってきた。病院に入った時から、麻子は既に安心し切っていた。賢は自分の意識が朝からずっと麻子に向いていたのを改めて知った。暫くの間、瞑目の中で思考を止めていたが、「パシヤッ」という湯しぶきの音で目を開けた。と一人の40歳くらいの男性が入ってきた。賢は意識を透明にしたが、先ほどの鋭い視線を発した男性ではないことが直ぐに分かった。賢は身体を洗うと、もう一度湯船に浸かってから上がった。番台は30歳前後の女性に代わっていた。賢は出口で麻子達を待った。10分ほど経って女湯から二人が談笑しながら出て来た。

「おまちどおさま、大分お待たせしたかしら？」

「いや、大したことないよ。混んでいた？」

「ううん、わたしたちふたり切りだったわ。だから愛子と大きい声で話が出来たわよ」

3人は湯冷めしないように急ぎ足で家路に就いた。通りに出ると賢は再び背後からの鋭い視線を感じ始めた。その時、遠くから空車表示を出したタクシーが近づいて来るのが見えた。賢は直ぐに手を挙げた。あっけにとられているふたりを促して押し込んでから、賢は自分が最後に乗り込んだ。賢は運転手にまず駅まで行くように言った。運転手は駅が近いことから不満そうだったが、駅に着いて止まる寸前に行き先をアパートに変更すると、腑に落ちないような顔をしながらも快諾してハンドルを切った。アパートの前でタクシーを降りると直ぐに、賢は意識を虚空に

向けてみた。先ほどの視線は感じなかった。3人はアパートの部屋に入った。

「あなた、一体どうしたの？」

「うん、誰かの視線を強く感じていたから撒いたんだ」

「誰かしら、厭だわ」

「ふたりともいいね。暫くは夜に外出する時は僕と一緒にだよ」

「ええ、そうするわ。ねえ、愛子」

「うん、分かった」

「じゃ、いよいよクリスマスパーティを始めようか？」

「わたし、キャンドルを用意する。お母さん、ケーキをお願いね」

麻子が持って来たケーキを真ん中に、その周りに3本の蠟燭を立て、愛子が火を灯した。3人で声を合わせて「きよしこの夜」を詠った。愛子の声は澄んでいて、賢と麻子の耳に快く響いた。

「クリスマスおめでとう！」

賢が言った。

「この幸せがいつまでも続きますように」

麻子が言うと、愛子が立ち上がって、靴の中から長さ20センチほどの細長い紙包みを2つ取り出して持って来た。

「はい、これは賢パパに、これはおかあさんに。わたしからのささやかなお礼よ」

ふたりは驚いた。礼を言ってふたりとも直ぐに紙包みを開けた。夫婦箸だった。

「わたしの分も買ったのよ。ほら、3人お揃いな」

「この子ったら」

愛子が帰還してすぐに麻子から貰った小遣いを使って買ったのは明らかだ。麻子は左手で目頭を押さえた。それでも涙が頬を伝わって流れた。3人はケーキを食べ、暫くして床に着いた。昨日と同じ形になって寝た。麻子は身体を縮めて、賢の懐に潜り込んだ。賢は右手でそっと麻子を抱きしめた。暫くすると、愛子が身体を寄せてきた。愛子の首下にも左手を潜らせて愛子の肩を抱き寄せ、両手でふたりを同時に抱き締めた。ふ

たりとも賢の胸に顔を埋めた。賢にとってはふたりとも幼子だった。愛子は父親の愛情を求めていた。ずっと満たされないまま幼い頃を過ごして来たことが賢には分かった。愛子が寝入ると、賢は身体の緊張を解き放って麻子の肝臓の上に手を置き、エネルギーの注入と肝臓の健康な状態をビジュアル化した。朝までその意識を維持した。明け方になって麻子が起き出そうとするのが分かった。麻子は賢が自分の肝臓の上に掌を当ててくれていたことに改めて感謝して、その手を静かに外した。賢は麻子の動きに合わせた。寝返りを打って愛子の方に身体を向けると、愛子はまだ寝息を立てて寝入っていた。賢はそっと愛子の髪を撫でた。髪を撫でられると愛子は身体を丸めて賢の懐に潜り込んで来た。賢は愛子を軽く抱きしめた。愛子は意識しているようだった。顔を賢の胸に押し付けてきた。愛子が寝た振りをして甘えているのが分かった。賢は愛子を抱き締めたままだった。

「御飯の支度が出来ましたよ・・・ほらほら二人とも、仲良く抱き合っていないでそろそろ起きてね」

麻子の言葉には、喜び半分、嫉妬半分の響きがあった。愛子は決まり悪そうに賢から離れると、伸びをしてから起きた。賢もやおら起き上がった。愛子は「おはよう」と言いながら立ち上がると直ぐにパジャマを脱いで上半身裸になり、下は下着だけになった。意識は幼児の純粹さだが、身体は既に大人の身体に近く、胸も丸みこそないが、ツンと突き出ている。愛子は賢の目も気にせずキャミソールを身に着け、そのまま流し台で顔を洗うと、押し入れの所に戻って学生服を着てその上からカーディガンを羽織った。麻子はそんな愛子の行動をさほど気に掛けていない様だった。賢が布団を上げ、愛子が食卓を用意した。麻子は出来上がっている料理を食卓に並べた。

「さあ、いただきますよ」

「いただきます」

拍子を合わせたかのように愛子と賢の声が溶け合った。

「わたしね、あさってからお休みなのよ」

「愛子、お正月の支度をするから、お休みになったら3人で一緒に買い

物に行こう」

「えっ？お正月？わたし、お正月はお祝いしたことないわ。お父さんが、「日本の神様や仏様は全部排除しろ」って言って、お正月のお祝いは無かったでしょ。大きな集会場に連れて行かれて、法華経のお話を聞いたことしか記憶に無いわ」

「愛子、それはそうよ。あの人は会の教義と法華経しか信じていなかったから。わたしが、わたしと愛子の入会を拒否していたのが随分気に入らなかったみたいね」

「大晦日に除夜の鐘を聞いて、お正月にはお雑煮を食べて、初詣をする。玄関にはお飾りを飾り、小正月には七草のおかゆを頂く。これが日本の正月さ。法華経でも観音経でも、そんなのはどうでもいいんだ。お正月は日本人たちの心だからな。愛子、今度のお正月は一緒にお祝いしよう。麻子ももう一度子供の頃のお正月を思い出せるよ」

食事を終わると愛子は麻子の用意した弁当を鞆に入れ、元気に「行ってきます」と声を掛けて出掛けた。賢は段ボール箱の食卓を角に押し戻して、部屋の中央に腰を掛けた。食事の後片付けを終わると麻子は賢の横に腰を下ろした。

「何も無いって、素晴らしいことだな。心が軽くなっているような気がする。しかし、もうすぐお正月だから、炬燵ぐらいは買おうか？」

「わたしは、何にも要らないわ。あなたが居てくださればそれだけでいいのよ。わたしはあなたより年上で、その上子持ちでしょう。それなのに、こんなにわたしを大切にしてくれるあなたがわたしには勿体ないわ。これ以上何も必要ないわ」

麻子は賢に凭れ掛かるように身を寄せた。賢は麻子の身体を受け止めて抱きしめた。二人は抱擁し合った。意識の一体感が、喜悦に高まる瞬間だった。暫くして麻子は賢を抱きしめる手を少し緩めて小声で言った。

「ねえ、あなた、死んだ後のこと分かるって言っていたわね。教えて」
賢は麻子が何故そんなことを聞くのだろうと思った。

「一般的に肉体が死ぬとね、霊体が肉体から出て中空に浮いた状態になるんだ。そして、暫く死後の自分を眺めている。霊体は本当の自分では

なくて、写像の虚像のようなものだ。1ヶ月半くらいはその霊体が自分の生きていた場の近くにあるんだ。初め意識はその霊体と共にあるけど、そのうち真我の意識は霊体を離れて真っ暗なトンネルを潜り、光の世界に出る。そこで三途の川のような境界を越える出来事に出会う。それから過去の省察が起こる。これもさせられているように思うけど、実は自分がしているんだ。その省察では、特に生前の意識の動きを振り返ることになる。大抵の人は無意識で生きているから、衝撃的なことだけが描き出される。特にトラウマになってしまったような出来事や、驚喜したような喜びを伴った感情はリアルに再現される。一般的に無意識に生きた人は自分の心に喜びの感情や苦しみの感情がわき起こった時のことを、情景を伴って思い出すんだ。しかし意識的に生きた人は全てが現在であることをそこで再認識する。というのは、自分の意志で全ての状態が決定されてきたことが分かるからだ。その省察が終わると、それからは定常状態に移行する。自分で選んでその世界に入ってゆく。それも譬喩^{ひゆ}だけだね。苦しみに苛まれ続けた人は、そのまま苦しみを引きずって安定状態になるまで地獄と言われる状況の中に居ることになる。人の為に生きた人は、意識が上昇するような状態になる。元々自分のものを何も持とうとしないし、実際持っていないから魂が軽いんだな。普通の人、生前とさほど変わらない環境を自分で作り出す。それは意識がそのような鑄型の中に填っていて、死んだ後もそこから抜け出していないからだ。このような人たちの魂はこの状態から抜け出すのに気の遠くなるような長い年月を掛けた度重なる生まれ変わりの中で、意識の自由さを認識出来るようになるまで繰り返されることが多い。よくカルマっていうだろう、あれだよ。だから、ある意味では苦しみの中に居て、地獄の中で全てを奪い取られ、求めても求めても得られず、苦しみばかりが襲って来るような状況にいる人の方が、魂を一気に軽くできる可能性が高いかも知れない。でも、苦しむから辛いけどな・・・麻子、おまえは今俺とふたりで生きることを至上の喜びの中で体験しているから、もしこの状態が維持できれば、死んだ後も同じような至福の状態の中に戻れると思うよ。多分、生まれて来る前もそこに居たんじゃないかな。俺たちはき

「っとこの世界で出逢うべくして出逢ったんだよ。おれには他にも愛する人がいるが、何故か分からないけど、お前に意識を向けると他の人たちへの意識を断ち切ってでもお前を守りたくなる。こうして、お前を抱き締めていると、安息感と満足感が高まってくるんだ。おれはこの生にはお前と出逢う為に生まれて来たような気がする」

麻子は賢を再び強く引き寄せた。

「わたし、わたし、気が遠くなるほど、あなたが好きよ。生まれてきてよかった。あなたに逢えてよかったわ」

麻子は身体を震わせた。その目から涙が流れた。ふたりは1時間ほど抱き合った状態でいたが、麻子が賢の腕の中でいつしか眠りに落ちたので、賢は静かに麻子を横たえ、一旦押し入れに収めた掛け布団を取り出して麻子の上にそっと掛けた。しかし、麻子は10分もしないうちに目を覚ました。自分に布団が掛けられているのに驚いたような顔をしたが、起きあがって直ぐに身繕いを整え布団を押し入れに戻した。

「布団掛けてくれたのね、ありがとう」

「身体の具合はどうだ？」

「もう、すっかり大丈夫」

「今から、2時間ほど、肝臓や、その他の内臓器官が正常に働くように意識を働かせよう。君の健康が安定することが大事だから」

「もうすっかり大丈夫だけど、あなたに大切にされているのは嬉しいわ」
賢は麻子の背後に廻り両手で麻子を抱えるようにして、右手を麻子のシャツの下に差し込み、肝臓の上に当てた。それからおよそ2時間ほど、ふたりは部屋の中央にじっと座っていた。麻子は体中が熱くなって来るのを感じた。賢は瞑想状態を保った。麻子もじっと瞑目していた。やがて瞑想から覚めると、ふたりは外の蕎麦屋でうどんを食べることにした。それぞれコートに身を包み、紀ノ川の堤を歩いた。麻子は賢の左手に自分の右手を絡め、身体を賢に凭れかけるようにして歩いた。夢の世界に居るようだと思った。時々腹の底の方から全身が震えるような感動が込み上げてきて、目頭が熱くなった。賢はふたりの後方からひとりの老人が近づいて来ているのに気付いた。老人は速い足取りでふたりを追い越

した。追い越すときに、呟くように言った。

「意識を解放しなさい。固定したり、遮断したりすることは最小限にしないではいけない」

賢ははっとした。海の老人だった。海の老人はふたりを追い越すと、直ぐに土手から通りに降りて行って姿が見えなくなった。賢は直ぐに自分の過ちを覚った。意識に制限を与えることで、世界に歪みを発生させてしまっていたことに気付いた。麻子に死後の説明をした時、意識の解放の大切さを教えておきながら、自分が間違いを犯してしまったことを悔いた。賢は麻子の方を見て言った。

「今の老人のこと知っているか？」

麻子には何のことか分からなかった。

「えっ？ 老人って？ 誰かいたの？」

賢は海の老人の姿が麻子の意識に捉えられていなかったことを知った。

「いや、俺の意識上だけのことのようにだ。蕎麦屋はどの辺りかな？」

「その坂を下りて、少し行ったところにあるわ」

さほど大きな蕎麦屋ではなかった。12時過ぎなのに客が一人もいなかった。ふたりはテーブルの席に着いてかけうどんを注文した。店主が5分も待たせずに二つの丼を持って来てテーブルの上に置いた。賢は遮断していた意識をどのように解放しようかと考えた。由美に対しての意識の解放にはまだ自信が無かった。祐子と亜希子に対しては、もうそろそろ解放してもいいと思ったが、怒濤の如く押し寄せてくるだろうふたりの意識の波をどう受け止めていいか自信が無かった。賢は先ず、意識に繋がりの無い原智明に意識を向けてみた。原智明研究会のことをイメージした。所長に話し掛けている原智明を想像した。原智明語録の中の文章を一つずつ暗唱してみた。うどんを啜っている麻子の姿が次第に霞んできて、全く別の空間が眼前に顕れた。それは不思議な体験だった。今いる場所は蕎麦屋のテーブル席ではなかった。自分も席に座っているのではなく、何処か分からないが一面背丈の短い野草で埋め尽くされた平原の中の一本道に立っている。遠方から一人の男性が近付いて来た。賢はそれが原智明だと感じた。何故そう感じたかは分からなかった。しか

し、確かに原智明だった。賢は原智明が想像していたほど小柄でなく、自分より少し背が低いただけだったので幾分ほっとした。

「原智明さんでしょう。わたくしは内観賢と申します」

「どうして、僕のことを知ったのですか？僕が失踪しているので意識で追跡したのですね」

「ええ、わたくしの意識があなたの意識とコミュニケーションできるかどうか試してみたのです。原さんは失踪してどういう状態にあったんですか？」

「あなた方から見えなくなっていたとき、僕は違う世界に行っていました。それは死後の世界とも、宗教が理想郷として想定した世界とも異なった、全く別種の世界です。見た目は地球上に出来ている世界と同じような世界に見えますが、地球の人たちが長い期間を掛けても実現できずにいる理想郷とも謂える世界なんです。多くの人たちが夢見てきたでしょう。ある人は桃源郷を、ある人は理想的な共産主義の世界を、そしてある人は曼荼羅の宇宙を。僕の経験した世界はそういった人間の経験則から発生した世界じゃないんです。それは地球上で当然のこととして受け入れられている常識をもってしては全く考えられない世界なのです。どんな世界なのか、少し説明してみましよう。その世界に住む人々はこの地球上に住む人々とあまり変わらない形をしています。ただ、地球の人たちの倍ほどの背丈がありますから、僕から見ると巨人のように感じました。それ以外の肉体的な特徴はこの地球上の人間とほぼ同じです。しかし彼らはほとんど食事をしません。食事はそれを楽しむ為にあって、身体の機能を維持する為に摂るものではありません。身体の機能を維持する為には、朝、活体剤と呼ばれる錠剤のようなものを2、3粒、水と一緒に飲み込みます。それで一日に必要なカロリーのエネルギーと身体を維持する為に必要な栄養素を取り入れます。それ以外には何も必要がないようです。これはどんな人もみんな同じです。そして、眠る時は休体台と呼ばれる台の上に横になって休みます。シーツも毛布もありません。部屋が常に適温になっていますから、その必要がないのです。部屋の中では普段、ほとんど音を出すものはありません。音は必要に応

じて出すことになっています。音が自然に発生するようなことはありません。音が出ると、何かに変化するようです。特に地球上の人間達が発生させている自動車の騒音のような不調和な音は皆無です。人々もほとんど口をききません。意志を伝えるときは相手の目を見て自分の意志を伝えようと思うだけで、相手が理解するようです。まるで、全員が瞑想状態にあるようです。それでも、時々声を出して話すことがありますが、それは言葉話すというより音楽を奏でるといような、美しく、心地よい響きです。この世界には経済活動はありません。必要なものは全て無償で提供されます。労働をして、収入を得て、それで生計を立てるとい仕組みがありません。だからといって、みんな遊んでいるわけではありません。人によって日々の行動が異なっています。ある人は一日中石を掘り出しています。ある人は先ほど言った活体剤の成分を研究しています。また、ある人はその活体剤を大量に製造する作業をしています。それを配送する人たちもいます。皆、それぞれに仕事を持っていて、好きなときに好きなだけ働きます。その労働は管理されていませんが、記録されていて、その記録を見て自分で調整しながら働いたりしています。地球上のような経済活動がありませんから、勿論給料の支払いもありません。何かを買うという行為がありませんから、流通紙幣のような仕組みは必要ないのです。欲しいものは、それを揃えている店に行ってもらって来るだけです。店の人は、誰が何を持って行ったかを記録するだけです。それは、不足を発生させない為と、コミュニケーションの為です。本当はそれも必要ないのですが、子供のようにまだ、意識の集中の仕方がはっきり分からない人たちの為の補助的な仕組みです。全てのものがそのように作られ、店に展示され、配られています。だから、当然犯罪を犯すものはありません。誤りは発生しますが、それは気が付いた時に直ぐに正されます。それもテレパシーで伝達されて、即時に対応が図られます。こんな話をしていると、何だかアダムスキーの円盤搭乗の話に似ていると思うかも知れませんが、確かにあれによく似ています。僕は初めの内、この世界に居たら、変化が無くて面白くないんじゃないかと思っていたんですが、とんでもない間違いでした。そこでの変化や、新

しい体験は地球上で味わう変化や、創造に比べて、比較にならないほど大きなものを体験できます。地球上では肉体という自分の乗り舟の感覚を通じて体験を行い、自分たちの作ったルールの中で最高の位置を得ようと努力しますが、そのような制限は一切ありませんから、そのスリルや達成感は比べようもありません。例えば、僕はやったことがありませんから詳しいことは分かりませんが、地球上ではゴルフというゲームがあるでしょう。遠くにある穴の中に、何回クラブを振ってボールを入れることができるかを競うゲームだと思えますけど、あれは自然の造形を破壊して、森の中に芝生のゲームセンターを作るでしょう。ここではそんな馬鹿なことはしません。自然の造作には手を付けません。以前、地球のゴルフの真似事をしてみた人たちがいましたが、彼らは自分たちの経験したいことをインスピレーションでブロードキャストしたのです。そうしたら、土地管理の仕事をしている人が30ヘクタールの空き地を用意してくれました。そのうち、土地開発の仕事をしている人たちが集まって来て、その土地の上に山や川を作りました。その工事の仕方は凄かったです。地球上のブルドーザーのようなものは全くないのですが、集まった人たちが念を集中して地形を変えていったのです。昔キリスト教か何かで、「この山動きて海に入れといえればかくなる」という話があったと思いますが、正にその通りでした。只、集まった人たちは随分疲れたようで、その後レストランに行って久しぶりの特別料理を食べたようです。その食事もしき物を料理したのではなくて、土から作られた栄養食です。分子を合成して食事に仕立て上げているのです。味は自分の好みに調理してもらうことができるのですよ。見た目の形を変えて欲しければ、それも対応してもらえます。でも、ほとんどの人が、標準形で注文しているようです。話は戻りますが、土地の形が出来上がったら、次に造園の仕事をしている人たちに地球のゴルフ場の形を真似た造園をしてもらいました。その半数以上は念で植物を移動させて作り上げていたようです。表面がデコレーションされてゆく過程はなかなか見応えがありました。丁度自然をテーマにしたドキュメンタリーフィルムを高速で回しているような感じです。そんな風にして、僅か2日ほどでゴル

フ場が出来上がりました。そのゴルフ場でゴルフ大会を行いました、参加者はあまりありませんでした。参加したほとんどの人が穴の中に玉を入れる遊びにはすぐに飽きてしまったようです。興味が薄れたようです。そのゴルフ場は地球の時間にして1週間ほど、そのままありましたが、次にラグビーのようなスポーツを経験してみたいという人たちの要望を受けてゲーム場を作るとのことで、改造されてしまいました。そんな調子で、一般の人たちはあまりゲームのようなものには興味が無いようでした。スポーツは結構盛んでした。地球にある陸上競技、水泳、スキー、スケートといった標準的なスポーツはほとんど同じようなルールでおこなわれています。ゲーム的な要素の高いスポーツ、例えば野球、卓球、バスケットボール、サッカーなどはあまり好まれません。地球に無いスポーツに空中飛行というのがあります。50メートルほど走って飛び上がり、空中にどれだけ滞空できるかを競うスポーツです。こんなものもあります。水族館などに行く^{いるか}と海豚のジャンプの演技があるでしょう。あれを人間がやるのです。水中からどれだけ高く空中に飛び上がれるかを競うのです。このスポーツは結構人気があります。経済の仕組みが無くて、よく社会が回って行くと思うでしょうが、正確には経済に替わる仕組みがあるのです。それは活動経歴という仕組みです。その仕組みにはギブアンドテイクの考えは入っていません。あくまで、どんな活動をしたかの経過を記録するだけです。ある人が何かを求めて店に行くと、その人の欲しいものを与えていかどうかの判断が、活動経過を基に自動算出されて、可否の判断が為されます。この活動経過の仕組みは家を手に入れるときも、衣類を手に入れるときも参照されます。そうそう、それから政治というものもありません。どの町も共同の集落のような形態をとっていて、丁度、日本の縄文時代の集落とそこでの生活を彷彿とさせるものがあります。何処の家に行っても、部屋の中にはほとんど何も置いてありません。どうやらライフウエアは壁の中に収納されているようです。これもアダムスキーの話と似ています。それから、もっと重要なこと、そう、健康維持の為の仕組みは、ほとんど病気がありませんから、病院のような設備はこの世界には1カ所しかありません。そ

れも不可抗力で肉体にトラブルが発生したときへの対応だけです。人々の寿命はばらついていて、30歳そこそこで肉体から離れる人もいれば、500歳くらいまで自分の肉体を維持している人もいます。地球で謂うところの死に対しては肉体の機能停止という捕らえ方をしている、その状態が起きる可能性が高くなると、次のプロセスに移行する計画を立てます。いつ肉体を離れるのかを決め、その後、どのような過程を選ぶかでその人の次の生まれ変わり、または他の世界への移行計画が決まります。それは管理されているわけではなく、全て自分で登録し、宣言するという形態を取ります。地球にある役所のような施設はあります。そこでは現在存在している全ての人が登録されていて、現在いる位置がモニターされています。そのモニターされた内容は、普段は誰も見ることができませんが、役所の勤務者だけが参照できます。ですから、人を探す場合は普通はテレパシーで探せますが、どうしても分からないときは、その理由の妥当性が検討され、認められれば役所の勤務者が情報を引き出して提供してくれます。ここではエネルギーコントロールが非常に重要な仕事になっていて、その為に働いている人が大勢います。ピラミッドのような建造物があちこちにあり、エネルギーの凝縮を行ったり、時空間の調節をしたりしています。道路はあまり整備してありません。というのも、道は歩く為のみあって、車のような乗り物は走っていないからです。人々が遠くに移動するときは空中に浮き上がって移動するマイカーを用います。その駆動装置は全てこの世界の太陽が送って来るエネルギーをキャッチして変換して使っています。大地を掘ってそこから燃料を取り出すようなことはしません。この星も生きています。彼らはこの星を傷付ける結果になるようなことはしません」

賢は原智明の話に聞き入った。童顔な原智明には全く濁りを感じなかった。

「僕は、別空間へスリップする瞬間、意識を自分自身に向けました。そして自分が何処に居るのかを認識しようとした。それは凄い出来事でした。全く光の渦の中に巻き込まれたような感覚を覚えました。光の渦です。本当にDNAのスパイラルの様な渦です。そして意識が遠くな

ったような感覚がして、気が付いたらさっき言った世界に居ました。どんな風にスリップしたか分かりません。だから、どうやって戻ったらいいかも分からなかったんですが、時々地球の誰かの意識が自分を呼んでいるのを感じました。その声に集中するとそちらの方向に引っ張られるのですが、その呼んでいる意識は直ぐに切れてしまって元に戻ってしまうのです。今回も無理かと思っていましたが、取りあえず意識を同調してみました。そうしたらこの空間に出ました。この空間はあなたと僕の共通意識が作り出した空間のように思います」

「わたくしは、あなたのように地球の空間から突然失踪してしまった人を、元の空間に引き戻すことを何度か行いました。今のところ、全て成功しています。あなたのこともトライしてみたいと思いますが、わたくしの意識の集中に同調してもらえますか？原さんにも自分を呼んでいる地球空間に戻ろうと強く意志して頂きたいのです」

「分かりました。あなたが僕を呼んでいると感じたら、その意識に同調し、帰還しようとする意志を持って意識を集中させてみます」

「では、その時はよろしくおねがいします」

ふたりが意識を切ると、賢の目に麻子の姿が浮かび上がってきた。麻子はうどんを啜っている。よく見ると、今の原智明との遭遇はほんの1秒ほどの間の出来事だったことに気付いた。賢は自分の意識が何処の存在にも繋がり易くなって来ているように感じた。これは早瀬由美との意識のコミュニケーションによる効果かも知れないと思った。

「あなた、食べないの、冷めちゃうわよ。おいしいわ」

「うん、食べるよ」

店の中は昼間なのに薄暗かった。店主と思ったのは給仕のようだった。奥から男性の呼び声があり、給仕をした男が「はい、直ぐ行きます」と応えたからだ。賢はうどんを一口啜ってから意識をゆきに向けてみた。ゆきの意識には繋がらなかった。そのままゆきの家の中に意識を持って行ってみた。しかし、思ってもいなかったことに気付いた。先ほどと同じように、麻子の姿が薄れていって、眼前に野岸孝子の家の部屋が顕れたのだ。部屋の中には誰も居ないようだった。賢は、これは一体どう

したことかと思った。遠隔透視ができるようだった。しかし、これが何処に対してでもできるかどうか疑問だった。再び意識を蕎麦屋に戻して麻子を見た。今度は麻子が賢をじっと見つめていた。

「どうしたの、何か変よ。どこか具合でも悪いの？」

「いや、今、少し意識の働きを試してみたんだ」

「意識の働きって、何？」

「自分の思ったところに意識を集中させて、その様子を伺うことさ」

「えっ！そんなことできるの？」

「うん、最近できるようになったようだ。今、少し試してみたんだ」

「それは凄いわ。ねえ、一寸愛子の様子が分かるかどうか試してみてくださいさらない？」

「うん、面白い。愛子に意識を集中してみるよ」

賢は愛子に意識を集中した。すると逆に愛子からの意識を感じた。その意識は非常に強かった。賢は心の中で愛子に呼びかけた。強い気の流れと共に愛子が突然目の前に顕れた。弁当箱を右手に、箸を左手に持っている。賢は驚いた。麻子は驚愕した。

「愛子どうしたの!？」

「・・・わたし、賢パパのこと考えていたら、とっても会いたくなっちゃったの。そしたら、ここに来てしまったわ」

賢は、「しまった」と思った。亜希子と同じようなことを言っている。注意しなくてはならない愛子に対してうっかり意識を集中してしまったのだ。その結果テレポテーションが起きてしまった。

「お弁当を食べていたの。昨日の夜のパーティのことを思い出していて、お母さんのことと、賢パパのことを思い浮かべていたの。そしたら、ふたりにとっても会いたくなっちゃったの」

愛子はふたりにと言い直した。

「愛子、うどんを食べるか？」

「うん、食べたいけど、そんなことしてもいいのかな？」

「俺達が後で学校まで送るから「少し意識が朦朧としていたから、外に出て気分を直して来た」って言いなさい。そして、それ以外には何を聞

かれても、頭がぼーっとしていたって言うんだ。いいね」

「うん、賢パパ、分かったわ。わたし、狸うどんがいいわ。だって、狸に化かされたみたいだもの。ふふふふ」

麻子と賢は吹き出してしまった。うどんは直ぐに出来た。愛子がフウフウ息を吹きかけて急いで啜り込むと、賢は給仕に頼んでタクシーを呼んでもらった。弁当箱と箸は麻子が預かることにした。学校の門の近くでタクシーを止めると、3人とも直ぐに降りた。愛子は急いで駆け出して行って学校の門を潜った。まだ昼休みの時間が過ぎていなかった。それを見届けてから、ふたりはアパートの方向に向かって歩き出した。

「実はね、もう一つ話しておきたいことがあるんだ。さっき、意識の働きを試していただろう、その時、以前鹿児島で失踪した人に意識を集中していたんだ。そうしたら、どうやら、呼び戻せる可能性が見えてきたんだ。この土地は愛子が帰還したり、テレポーテーションしたりし易い場になっているようだから、ここで試してみたいんだけど、いいかな？」

「わたしは構わないわ。あなたのすることは何でも信じているもの」

「じゃ、紀ノ川の土手に行こう」

ふたりは紀ノ川の堤に向かった。風が冷たかったが、まだ陽が高かったので辛くはなかった。賢は堤に立つと、自分の腕に吊り下がるようにくっついて麻子に少し離れるように言った。麻子は賢の左側に2メートルほど離れて、紀ノ川の方を向いて立った。賢は3回深呼吸をして瞑想を始めた。麻子は賢の姿をじっと見つめていた。賢は思考を止め、呼吸を整えて意識を原智明に向けた。さっき見た原智明のビジョンが眉間に現われてきた。賢は原智明を呼び戻す意識の状態に移行した。麻子は賢の姿を捉えてじっと見つめ続けたが、賢は全く動かない。まるで立ち杭の様な印象を受けた。15分間という時間が麻子にはとても長く感じられた。賢の原智明を呼ぶ意識が次第に強まってくると、それに伴って原の姿がリアリティを増して来て、原が目の前にいるという感覚に包まれた。賢が右手を差し出すと、原はそれに応えて右手を出し、ふたりは握手を交わした。その瞬間賢の身体に衝撃が走った。瞑想を解くと眼前に原智明が顕れていて自分と握手をしていた。原は背広にネクタイを締

めている。勤務状態での失踪を物語っていた。麻子は賢の姿に視線を固定していたので、原の頭れる瞬間を捉えることができた。それはこれまで一度も見たことのない様な場の変化だった。賢の手の先が次第に霞んでいって、その前の空間に溶けてゆくように見えた。原が頭れるときは原の周りの空間が曇気楼の様な、恰も光学フィルターを通して覗いているような状態になり、その領域だけは遠方の景色がデフォルメされているようだった。しかし、周りの景色がその空間で遮断されているような感じではなく、空間が歪んでいるという表現がぴったり合うような状態だった。やがてその状態が次第にリアリティを増してゆき、丁度カメラのピントを合わせているように、徐々に輪郭が表れてきて、やがて周りの景色と同じようにイメージがはっきりしてきた。原智明が頭れても、5分間ほどふたりはそのまま動かずに握手をした状態で佇んでいた。麻子も身じろぎもせずそれを見守った。あまりに不思議な光景を目の当たりにして、麻子は目が眩んだような感覚を覚えた。やがて賢が握手の手を離して口を開いた。

「原さん、もう意識は戻っていますか？」

「はい、まだ頭がぼーっとしていて、それに少し頭痛がしますが、身体全体が次第に固くなってきて、この空間に合ってきているような感じがします」

「原さん、紹介します。麻子さんです。ここで失踪した愛子さんのお母さんです。四月からは僕の扶養家族になります」

麻子はどぎまぎした。原智明が頭を下げると、顔を赤らめながら慌てて頭を下げた。

「先ず、いつもわたくしがするように、失踪状態から帰還したらできるだけこの空間に存在を確定する為に、何か食べるか飲むかして、この世界と肉体の接点を作った方がいいと思います。呼吸による接点もありますが、呼吸は何処までが物質的な接点か分かりませんから、やはり何かを食するのがいいと思います」

「僕もそれには同感です。水が一番手っ取り早いでしょう。消化器官にも、循環器官にも浸透してゆきますから」

3人は堤から車道に通じる階段を降りると、麻子に導かれて通り沿いにある喫茶店に入った。ウェイトレスが水の入ったグラスを3つ持って来ると、原は盆の上からそれを一つとって一気に飲み干した。ウェイトレスは微笑みながら注文を聞いた。

「いらっしやいませ。ご注文を伺ってもよろしいでしょうか？」

賢と麻子はコーヒーを頼んだ。原はウェイトレスの顔を見つめながら言った。

「あの一、水と、オレンジジュースと、サンドイッチはありますか？」

「はい、サンドイッチはハムとたまごのサンドになりますますがよろしいですか？」

「おねがいします。それと、水は2杯たのみます」

原は賢の方を見て確認するように言った。賢は軽く会釈した。

「ところで、原さんは失踪した時から今までずっと意識を働かせていましたか？」

「ええ、それがカーネル（核）に繋がる唯一の方法と思っていますから、常に意識を覚醒させています。あの時もそうしていましたから、自分が別空間に移動する過程も見えていました。どちらかという、自分が見ているというより自分に見られているという感覚ですね。視点がここではなくて、ソース（源）の方にあるんです。そういった状態ですから、この空間と失踪時の空間とが、違ったものには見えなかったです」

「もうじき、人の意識が変わるのでしょうか。この世界が別の世界になるように」

「それを計算したんですよ。おそらく、シフトが起き始めるまで、あと2、3年ほどしかないでしょう。現在は非常に不安定な状態にあるんですけど、ほとんどの人の意識が過去の規範に基づいてものを認識していますから、ずっとシフトのプロセスに入れなかったんですよ。でもそれも、外側に投影された銀河のエネルギーのフローから計算すると、地球人口70億の固定概念のエネルギーは、まもなく変容を余儀なくされてくるはずですよ。大昔の人は知っていました。岩に刻まれた情報を読むと解ります。今の人たちが、人間を動物にしてしまったんですね」

「わたくしもそう思います。でも、最近いろいろな人たちがそのことに気付き始めているんじゃないですかね。ロハスとかスローライフとか、そういう方向を志向して来ているんじゃないですか」

「そう、確かにおっしゃる通りです。ただ、スピードが遅すぎて、エネルギーの流れが変わり始めるまでに間に合いません」

ウエイトレスが2杯の水と2杯のコーヒー、オレンジジュース、サンドイッチを持って来た。コーヒーを啜りながら賢は言った。

「近々人間の意識の変容を意図した政府主導のプロジェクトが立ち上げられます。実はわたくしはそのプロジェクトを推進する役割の一端を担うことになったんです。日本からスタートするんです」

「そうですか。それは面白いですね。人の心は一番捉えにくいですから、やりがいがあるでしょう。まだ、帰還したばかりだから、大それたことは言えませんが、僕にも手伝わせて頂けませんか？」

「それは大歓迎です。原さんのような意識を持たれた方が協力してくれば、万人力を得たようなものです。いやそれ以上でしょう」

「まずはこの社会に復帰する必要がありますね」

「今、いきなり失踪からの帰還を公にすると、原さんの身に危険が及ぶ可能性があります。研究室所長の馬場さんが失踪してしまったんです。どうやら拉致されたようです。原さんのパソコンに残っていた資料を保管していたんですが、犯人はそれを狙ったようです。でも、所長さんは拉致される前にすべての資料をどこかに隠してしまったようですから、危険勢力の手に落ちてはいないと思いますが」

「そうですか。確かに僕のパソコンには悪用したら、とんでもないことが起きるような資料も入れてありました。馬場さんは分かっていますから、多分誰にも知られないような隠し方をしていると思います。僕には大体その場所の見当は付きます。いずれにしても、暫くは僕が帰還したことは伏せておきましょう」

「しかし、社会への復帰を宣言しないで、国内で働くのは難しいんじゃないですか？それに、プロジェクトが進展すると、海外にも出掛けなくてはならないでしょう。パスポートが問題になります。やはり、できる

だけ危険を冒さずに復帰することが望ましいでしょう。こうしたらどうでしょう。短時間の内に警察と市役所を廻り報告と同時に転出届を出して、東京に移住してしまうのです。東京の住所は架空の住所にします。実際には暫くの間、わたくしの住まいに同居するようでしたらどうでしょう。警察や役所には、所長の拉致事件との関係から、原さんの帰還を秘匿する必要があることを説明し、マスコミに知らせることのないように依頼して了承を得ておくのです。東京に移動してからはわたくしの勤めることになっている会社に就職して、プロジェクトに参加してもらおうというのはどうですか」

「暫くは大丈夫でしょう。いずれにしても、人間の意識を変容させるプロジェクトなどというものが好感を持って受け入れられる訳はありません。僕ばかりではなくて、あなたも反対勢力や地下組織に狙われるでしょうから、細心の注意が必要になります。警戒しながら、全人類の意識の変容の為に頑張りましょう」

麻子はきょんととしてふたりの話を聞いていた。

「奥さん、今ご主人と話したことは絶対他言しないでください」

麻子は奥さんと呼ばれて、ドキッとしたがどぎまぎする心を抑えて応えた。

「も、勿論です。わたしは無言でこの人に附いてゆくだけです。誰にも何も話しません」

「原さん、大丈夫ですよ。麻子と自分はお互いに相手のことを最も大切にしていますから。お互いを危険に晒す様な真似はしませんよ」

「失礼しました。ところで所長ですが、今、プーケットのリゾートに居ます。幽閉されています。まあ、幽閉といっても4、5人の男女に取り囲まれて生活しているだけですけど」

「分かるんですか？」

「失踪している間に所長と会いました。勿論、所長の意識との会合ですけどね。僕に拉致事件のあらましをビジョンで見せました。拉致した相手のことはよく分かりませんでしたが、幽閉されている場所は大きな1枚窓のあるリゾートマンションの1室のようでした。所長と会ったのは

1度だけです。それから所長の方からの意識のアプローチがなくなったんです。僕も他の存在との遭遇があって、意識はそちらに向いていましたからその後追跡もしなくなって・・・まあ、その件は追々話しましょう」

「今日は12月26日です。明日、鹿児島に行つて来ましょう。明日中に総て済ませて仕舞いましょう。そして、原さんは鹿児島からいきなり東京に行つてください。わたくしが仲間を羽田に迎えに来させます。わたくしのマンションに行つてください。これがマンションの鍵です。預かっていてください。ゲートにはセキュリティガードが掛かっています。キーナンバーは1756283です。もし、忘れたら案内する仲間から聞いてください。暫くそこを拠点に生活しててください。マンションのものは何でも自由に使ってください。と言つても何もありませんけどね。わたくしは1月5日過ぎに一旦東京に戻ります」

原智明がサンドイッチを食べ終わったのを見計らつて、賢は原を促して喫茶店を出た。麻子に聞いて岩出ビジネスホテルに向かった。原智明に一泊させるつもりだった。賢は歩きながらスマホの電源を入れた。50通ほどの留守電の登録があつた。賢はそれを無視して、飛行機の予約確認をした。大阪伊丹空港から鹿児島行きの9時50分の便を確保できた。帰りは原智明の東京行きの便は確保できたが、大阪に戻る賢の分はキャンセル待ちになつた。賢は気を振り絞つて祐子に電話を掛けた。祐子は電話口で泣いた。何も言わなかつた。賢は淡々と用件を言つた。

「ごめん、祐子、何も聞かないで、俺の言う通りにしてくれないか。明日の夕方6時半過ぎに、原智明さんが羽田空港に着く。彼を出迎えて、俺のマンションに案内して欲しいんだ。彼に20万円渡して欲しい。おれは1月5日過ぎに一旦帰る。その時、いろいろ説明するから」

はじめ涙声だったが、一呼吸置くと祐子の声に元気が出てきた。

「うん・・・原智明さんって？・・・まさか鹿児島の原智明さんなの？」

「そうだ。だけど、これは極秘だ。原さんといろいろ話をして、教えてもらえ。個人的なこと、特に失踪事件や所長の拉致事件なんかについては何も尋ねるなよ。それから、誰にもこのことは話してはだめだぞ。祐

子と亜希子以外の者、たとえ藤代肇さんにでも知られてはならない。いいな、絶対だぞ」

「分かったわ。あなた、どこにいるの？鹿児島？」

「今は何も聞くな。後で説明する」

「亜希子さんもいるわ。代わる？」

「うん・・・もしもし、亜希子か？元気か？」

「・・・はい、賢さんはお元気でしたか？」

賢は亜希子が冷静なのに驚いた。しかし、亜希子の声には喜びの感情が溢れていた。

「いま、祐子に説明したから、ふたりで協力して原さんがそこで生活を始められるように、世話をしあげて欲しいんだ。俺の部屋に住んで貰えるように世話をしてくれないか」

「わかりました。あの・・・お体に気を付けてください」

賢は電話を切った。

麻子が賢の電話のやり取りを聞いていた。麻子は自分の存在が、賢を苦しい立場に追いやっていると。しかし、賢から離れたくないという感情はそんな気持ちをも打ち消してしまった。賢は留守電を調べた。最近の留守電は祐子からだった。ただひとつ「あなた、愛してる。早く戻って来て」というものだった。その前も祐子だった。その前も祐子だった。祐子は1時間おきに電話を掛けて来ていた。ほとんどは半分泣き声が混じっていた。祐子からの電話の間に、数馬からの電話が入っていた。数馬はプロジェクトの話をしていて、自分の会社の案がほぼ完成したので、一度説明したいと言っていた。そして、また祐子からの電話が何通も何通も着信していた。賢が電源を切った直後からそれが続いていた。まだ3日も経っていなかったが、メッセージを残すだけで、電源を切ってしまうことが祐子にとっては如何に衝撃的なことかを思い知った。亜希子は賢が待つように言ったことで安心していた。賢の意思に従って待つことに決めていた。待つことには慣れていて、賢はスマホの電源を入れた状態のままにした。賢と麻子は岩出ビジネスホテルで原智明と分かれた。賢は明日の朝5時半に来ると伝えた。ホテルが視界から消

えると、麻子は賢の腕に縋り付いた。

「あなたのこといろいろな人が待っているのね。わたしのような者の為にあなたが動けなくなるのはとても辛いわ」

「心配しなくてもいいよ。君が元気になるまでは一緒に居るから。元気になったらまた活動し始めるけど、いつも君を見守っているよ。取りあえず明日は鹿児島に行き来するから、今夜はずっと抱いてあげてあげる。

何も心配無いよ」

麻子は賢の左腕を強く抱きしめた。ふたりはスーパーに寄って夕食の材料を買った。イサキを3尾と生姜を買った。「今晚はイサキの塩焼きにしましょう」と麻子が言った。賢は黙って頷いた。アパートの部屋に戻りストーブに火を付けると、賢は麻子の手を取って引き寄せ、抱き締めた。その時、愛子が音を立てないように注意しながらドアを開けて入って来た。背後からふたりを驚かそうと思っていたのだ。ふたりはその音に気付かなかった。愛子が上がり口に立ったとき、ふたりが抱き合っている光景が目に入り込んで来た。愛子は一瞬躊躇したが、今度は目を逸らさずにじっとふたりを見つめ続けた。抱き締められて恍惚としている麻子の姿を観て心臓の鼓動が激しくなってきた。暫くして、漸くふたりは入り口に愛子が立っているのに気付いた。麻子は慌てなかった。身繕いを直しながら言った。

「愛子、い、いつ帰ったの？」

「さっき」

「おかえり」

賢も決まり悪そうに愛子に向かって言った。麻子は悪びれずに言った。

「わたしたちのこと、見ていた？」

「うん」

「男と女が愛し合うと、自然に抱き合ってしまうの。ごめんなさいね」

「ううん、ただ、わたし・・・ドキドキしちゃった」

「ごめんなさいね」

麻子が食事の支度を始めた。愛子も食事の支度を手伝ってイサキを焼いた。賢は少し体裁が悪かったが、段ボール箱の食卓を用意してその前に

座って待った。やがて支度が調うと、3人は食事を始めた。賢は少し照れ臭かった。愛子と麻子はそんな気配を感じさせない。賢は「女性はなんと大胆なんだろう」と思った。ふたりとも、何事もなかったようにしている。箸でイサキの皮を除きながら愛子が言った。

「おかあさん、好きな男のひとに抱きしめられている時はどんな感じがするの？」

愛子は明らかに賢を意識して話していた。麻子は躊躇せずに言った。

「女は、愛する人に身を任せたくなるのよ。受け身なのね。優しくされると、身体が開いてくるの。自分で意識しなくても自然にそうなるのよ。抱きしめられるときも、自然に男性を受け入れる姿勢を作るように動くのよ。そんなときは身体全体、どこに触れられても興奮してしまうのよ。特に、敏感な部分もあるけど、そんなところに触れられると気が遠くなってしまいそうになることもあるのよ。それに、愛する人に触れられると、深い喜びに浸れるのよ。あなたも、もう少し経って好きな人ができれば分かるわ。それで、心と心が一つになると、もう自分が無くなったような深い深い歓喜に浸れるのよ。宙に舞っているような感覚よ。相手をとっても愛していると、好きという感覚も無くなって、溶けてゆくような感覚になるの」

その話には賢が口を挟んだ。

「僕に言わせれば、それは神の恵みだと思うんだ。心が伴えば相手と完全に一体になって至福の状態になれる」

「相手の人を好きな場合は、その人がどんな人でも喜びを感じるのかしら？」

「きっとそうでしょうね。お母さんは、この方しか愛していないから他の男の人のことは分からないけど、この方に抱き締められている時しか自分が消えるような喜びは感じないのよ」

「お父さんとはどうだったの？」

「思い出したくない。苦痛しかなかったのよ。愛子、もうこの話は止めましょう」

それから3人は無言になり、黙々と食事をした。食事を終わると麻子は

後片付けをした。愛子は今日の授業の復習をした。賢は明日の鹿児島行き
の支度をした。この日は風呂には行かないことになっていた。目覚まし
時計が11時を少し回った。賢は押し入れから布団を出して昨日と同じ
ように敷いた。洗面所に行ってからトラベルバッグを開けパジャマを
取り出して着替えた。麻子も押し入れの前に行ってパジャマに着替えた。

「愛子、後をお願いね。ストーブは消してね」

そう言うと、麻子と賢は床に着いた。狭い布団だったので、二人は身体
を付ける様に寄せ合って寝た。賢は麻子の肝臓の所に手を当て、肝臓が
正常に機能しているところをイメージして瞑想した。麻子もその賢の行
為を知って、静かに身体の緊張を解いて瞑想した。30分ほどして、麻
子は寝入ってしまった。賢は身体を少し麻子から離し仰向けになった。
右手は麻子の肝臓の上に置いて瞑想状態を維持した。少しして、愛子
が復習を終えたと見え、ストーブを消し、灯りを一つ消して補助灯を点
けた。薄暗くなった部屋の中で愛子の動く姿がシルエットとして襖に映
し出された。愛子は静かに押し入れに近づき襖を開いて、パジャマを出
した。賢はその襖が擦れる音で目を開けた。麻子は寝入ったままだった。
愛子はパジャマに着替えると、着ていた制服をきちんと畳み枕元に置い
た。賢は、愛子に捕らわれた意識を麻子の肝臓に戻し目を閉じた。賢が
麻子の肝臓に意識を残しながら睡眠状態に入ったとき、愛子が左手で賢
の左手を握った。愛子はいつの間にか賢の近くに身を寄せて来ていて、
身体を賢に向けていた。賢は暫くの間気付かない振りをしていて。そし
て、愛子がふっと溜息を吐いて賢の手をそっと元の位置に戻した。賢は
ほっとして、そのまま麻子の肝臓に意識を戻して寝入ってしまった。翌
朝5時に賢は目を覚ました。賢は自分の起きたい時間に目覚めることが
できる。ふと肩を出して寝ている愛子に目を向けた。愛子は仰向けに寝
て熟睡していた。麻子の方を向くと麻子が目を開いた。賢は麻子を抱き
寄せ口づけた。麻子は半分眠そうにしながらも、賢に応じて抱き付い
てきた。二人は静かに起きあがった。麻子が耳打ちした。

「支度は出来ているのですか？」

「うん、直ぐに出掛ける」

賢は身繕いを整えてアパートを出た。原智明は岩出ビジネスホテルのエントランスの外に出て待っていた。

「おはようございます。昨日は休まりましたか？」

「おはようございます。ええ、なかなかいいところですね。温泉がとてもよかったです。この辺りも場としては鹿児島に似た雰囲気を持っていますね」

ふたりは和歌山線で一旦和歌山駅に行き、そこで大阪空港までの乗車券を買った。それから阪和線に乗り替えた。朝の電車は空いていた。賢が原に話し掛けた。

「原さん、和歌山は初めてですか？」

「ええ、僕は鹿児島からあまり出ないんです。大阪より北には行ったことがないんです」

「でも、別の星まで行ったでしょう」

「時空間を変えれば、この世界での場所は位置的な意味を失いますからね」

「時空間を変えるなんてことは、簡単にはできないでしょう」

「普通はできないでしょうね。でも、仕組みが分かかって、自分を完全に掌握できれば可能でしょう」

「原さんはできるのですか？」

「やり方は分かりましたが、自分自身を掌握し切っていませんから、まだ不完全です。でもできる人もいますよ。僕の知り合いで仙人の様な老人がいます。その老人はこの時空間と別の時空間の間を自由に行き来しています。僕はその人から、いろいろなことを教えてもらいました」

「わたくしにもその方によく似た老人の知り合いがあります。よく海に現れるんで、海の老人なんて呼んでいますけど、その方はボートで海の上を滑るように進みます。どこからともなく顕れて、どこへともなく消えてしまうんです」

「その人はもしかして、ムクウさんといいませんか？」

「そう、ムクウさんです。やはり同じ人だったんですね。そうじゃないかと思いました。わたくしも、海の老人からはいろいろなことを教わり

ました。つい昨日も会ったばかりです」

「ここに来たんですか？」

「ええ、わたくしも鹿児島で一度、別空間に失踪したんですが、その時にわたくしたちに失踪を体験するように仕向けたのが、ムクウさんです」

「そうでしたか。そうすると、やはり垂水ですか？」

「そうです。どうしてそれをご存じで？」

「僕も垂水に向かっている時だったからです。でも僕の場合は失踪自体の体験ではなくて、多分、別の時空間を通して他の星に行かせる為だったような気がします」

「同じ垂水に向かう途中でも、わたくしたちの場合は鹿児島湾をフェリーで行ったのですが、原さんの場合もそうですか？」

「僕はバスで行きました。バスを降りて歩き始めた時、空に大きな穴が空き、その中に吸い込まれるような感じで上昇した記憶があります」

「でも鹿児島湾で、原さんの靴の片方が見つかったって聞きましたけど」

「多分、それは僕のではないでしょう。今履いている靴がその時履いていた靴です。ご覧ください、両方とも揃っているでしょう」

「とすると、海の方角から行ったか、陸伝いに行ったかは問題じゃないんですかね」

「僕が思うに、それは意識の方向じゃないでしょうか。意識を垂水の方向に向けるということは、自分が垂水という場に向かうということで、多分、それが他次元へのポータルを意味するんじゃないかと思うんです。つまり、ある目的を持って鹿児島から垂水に向かうことです。その1次の目的とはムクウさんに会うことだと思います」

「やはり、原さんの考え方は違いますね。わたくしはそこまで考えが及びませんでした」

「この世界に住んでいると、どうしても既に築き上げられている既成概念で考えてしまいます。垂水と言った時は、どうしても鹿児島県垂水市の何某地区と考えて、その2次元的ロケーションをイメージしてしまいます。これは如何ともし難いことだと思います。ところが僕たちがどこかに行こうと考える時、その目的地となった場所は地理的な場所を差す

だけではなくて、環境や気候、風俗や習慣、様々な要素が含まれていて、場合によっては目に見えない精神的な内容を差していることもあるはずです。それを意識して生きることが、この時空間の呪縛を解く鍵でもあると思います。よく、悟る為には自己を捨てるように謂われるでしょう。それと同じで、自己として認識しているものが不確かで、もともとそんな形態はこの時空間上の映像みたいなものだと見なすと、この世界の認識の仕方が変わると思います」

「なるほど、それはわたくしも同感です」

「ところで、内観さんは統計学に詳しいですか？」

「大学の一般教養で学びましたから少しは分かりますが、あまり詳しくはありません」

「正規分布の考えの中に中心極限定理という考え方があるでしょう。自然界の多くの同じものを集めてゆくと、その特性の分布が正規分布になってくるってやつですが、これを人間の意識に適用すると、今の世界が人間の意識の平均値によって出来上がっているという考えが浮かび上がってくると思うんです。もともと、この世界が出来た結果から見ての推察になりますが、人間の意識は社会に作用して社会を変化させ、その変化した社会から逆に影響を受けて自分を創っている。この世界はそうして出来ていると思うんです。それを変えてゆく為には、どこか人類の一部の人たちに新しい認識の仕方を適用させ、その人達が強い影響力を發揮すれば、それが一部の環境や社会に影響を与え、その結果が多くの人の意識を変え、更にその結果として環境や社会が変わってゆく、ということになると思います」

「そう、今度のプロジェクトもそのようなことを意図しています。だから、先ず日本人にそれを適用するところからスタートしようとしています。日本人はだっちゃんやフラフープやインベーダーゲームのような経験がありますから、うまくゆけば、一つのソリトン（単一波）を作れると思います。そのソリトンで世界の人々を目覚めさせ、そして、その後は拡大するインフラの力で世界中の人々の意識を変えてゆくという2段階の取組にしたいと思っています」

二人は電車の中で、お互いの考えを話した。賢は原の洞察力の鋭さに感心した。そして、更に原は一切の既成概念を取り除いてものを考える能力があることに気付いた。賢は原が近くにいることに感謝し、喜びの感情に満たされた。ふたりが話し込んでいる間に電車は天王寺駅に着いた。そこで大阪環状線に乗り替えて大阪に出ると、ふたりは一旦駅を出て梅田まで歩いた。流石に大阪の中心街だけあって、朝から人でごった返してる。原は混雑の中を進む内に元気が無くなってきた。賢が気遣って言葉を掛けると、いろいろな人の波動の影響を受けているとのことだった。10分そこそこしか歩かなかったのだが、ふたりはやっとの思いで梅田駅で阪急宝塚本線に乗り込んだ。阪急電鉄で蛍池まで行ってモノレールに乗り替え大阪空港に至った。8時10分を回っていた。予約は確保されていた。搭乗までに1時間以上の余裕があったので、賢はアメリカの両親の家に電話を入れた。

「Hello! Ken speaking.」(もしもし、賢だよ)

母は直ぐに電話に出た。

「Oh, Ken, how have you been. Are you OK? I' m afraid you' ve forgotten us. I' m missing you so much.」(あら、賢、どうしていたの？元気？私たちのこと忘れてしまったのかと心配していたのよ。あなたが居なくてとてもさみしいわ)

「Sorry, Mom. Are you OK? I love you. I never forget you. You are always in my mind, Mom. How are your business, Mom, and how about Dad? Both of you are still involving with hospital job? Is there Dad?」

(ママ、ごめんなさい。元気？僕はママを愛しているよ。忘れるなんてことはないよ。パパとママは何時も僕の心の中に居るから。仕事の方はどう、ママ、それからパパはどうかな？二人ともまだ病院の仕事をしているの？お父さんはそこに居るの？)

「He' s in the hospital now under operation for an urgent surgery. He' s working every day, every time to help people. I' m supporting him. You know it, don' t you.」(彼は、緊急の手術で執刀中よ。彼は毎日、いつも人々を助けるために働いているわ。わたしはパパを助けているのよ。

あなたも知っているじゃない)

「Mom, I know it well. Tell him “hello, I’ m OK and take care of you. ” Mom. So, I call you because I need some money for the living several months. I quitted my job three months ago and I’ ll start an important project, Mom. Please deposit 10 thousand dollars into my account? I’ ll back you it as soon as possible.」(ママ、よく分かっているよ。パパに「お元気ですか、僕は元気です、身体に気を付けてください」って伝えてね、ママ。ところで、2, 3ヶ月生活するためのお金が必要になって電話したんだ。僕は3ヶ月前に仕事を辞めて、重要なプロジェクトを開始するんだ、ママ。僕の口座に1万ドル振り込んでほしいんだ。できるだけ早く返すようにするから)

「OK, I got it, Ken. I’ ll do it tomorrow morning. Is it OK?」(わかったわ、賢。明日の朝振り込むわ。それで良いの?)

賢はほっとした。母は何も聞かずに賢の頼みを受け入れた。

「Thank you, Mom. I always love you. Take care of yourself, Mom. Goodbye now.」(ありがとう、ママ。身体に気を付けてね、ママ。それじゃ)

「Goodbye Ken, my sweet.」(じゃあね、賢、私の可愛い子)

「お母さんですか？」

「ええ、アメリカのスコッツデールに住んでいるんです。尤も5年ほど会っていませんが」

「僕には両親の記憶がありませんから、分かりませんが、母の愛はやはり大きいですね。優しさが僕にまで伝わって来ました」

「原さんは女性を愛したことがありますか？」

「勿論ありますよ。2度ほどですけど。僕は相手の女性に直ぐに理想的な姿を意識してしまうんで、長く続かないんです。心が相手に伝わりません。賢さんはどうですか？」

「わたくしは直ぐに人を好きになってしまうんです。男性も女性も。特に女性に対しては、意識をその人に向けると、もう無条件に愛しているといった感じになってしまうんです。浮気性なんじゃないかな」

「一人の女性を愛し始めると、他の女性への愛が冷めてしまうということですか？」

「いいえ、冷めるなんてことはありません。みんな好きになってゆくんです。自分でも不思議な程です」

「それなら、何も問題無いんじゃないですか？」

「この日本ではそういう生き方はできないでしょう。二人以上の女性を愛したら変質者の様に扱われるでしょう」

「日本の社会規範ではそのように見られがちですね。でも、それも超えればいいんじゃないですか？」

「ええ、そうしようと思っています。今度のプロジェクトが完成すると、結婚の形が変わってくると思います。こういうタイプの人間ですから、丁度いいので、わたくしはその魁を演じてみるつもりです」

「それは面白いですね。是非拝見したいところです。ところで、賢さんは昨年連続して発生した失踪事件について調査をしているとのことですが、これまでに解決できた事件はありますか？」

「昨年発生した失踪事件ではあなたの場合を含めて5件の解決ができました。それ以外に自分たちの拘わったものが1件、これはさっき言った鹿児島湾での自分たちの失踪で、他の人たちに解決してもらったという形になっています。そういう意味では、自分が最初の問題解決者ではなくて、わたくしのフィアンセ祐子とその義母が初めてこの問題を解決したということです」

「その祐子さんとお義母^{かあ}さんは凄い方達ですね。一度お会いしたいです」

「直ぐに会えますよ」

ふたりが鹿児島空港に降り立ったのは11時を回った頃だった。飛行機の窓から見える外の景色が雨に霞んでいた。飛行機を降りると、ふたりは直ぐにバスの発着所に向かった。賢にとって久しぶりの鹿児島だった。原はほとんど失踪後の時間経過を感じていない。ふたりはバスターミナルに立って鹿児島市内行きのバスを待った。10分も待たずにバスに乗ることができた。突然原が辺りを見廻し始めた。そして小声で賢に囁い

た。

「賢さん、今、所長の姿を見ました。3人の男と一緒に。少し離れているので、分かりにくかったのですが、急いでタクシーに乗って行きました」

「えっ？ でも、所長は外国に幽閉されているようだって・・・確かに所長さんでしたか？」

「間違いありません。男達に強要されているように見えました。タイからの直行便は無いはずですが。国際便では、この時間までに着く便はないから、おそらく成田空港を経由して入って来たんでしょう。バンコクからは朝の便もありますから」

賢は原がどこで国際便についての情報を得たのか不思議に思った。原は一瞬の観察で、大量の情報を記憶できる才能を有している。どこかで時刻表を見たのだと思った。

「所長が鹿児島に来たとなると、直ぐに警察が動き出すでしょう。急いで警察に寄って帰還の報告をしてしましましょう」

鹿児島県警察署に着いて、賢が受け付けで原の帰還を告げると、受付の女性は奥に行き行って責任者と思われる男性を連れて来た。責任者は賢を見ると驚いたように言った。

「あなた、先日失踪して帰還した方ですね。何か事情がありそうですね。詳細の説明をしてくれますか？」

賢は早く別の場所に移りたかった。そこはあまりにも目立つ場所だった。

「はい、わたくしも原さんの帰還に関係したので同行しました。しかし、原智明研究会の所長の拉致の問題もあり、報道関係者に原さんの帰還の情報が漏れると、原さんの身に危険が及ぶかも知れないのでマスコミに公開しないで頂きたいのです」

「そうですね。取りあえずこちらに来てください」

ふたりは取調室に案内された。

「こんなところで申し訳ありませんが、ここが一番安全ですので、ここで原智明さんの帰還について説明して頂けますか」

「はい、分かりました」

責任者の男性は一旦部屋から出ると、男性2人と女性2人を伴って戻って来た。二人の女性は記録帳を持っている。賢は先ず、空港で原智明研究会の所長を見掛けたことを話した。原が確かに所長だったとフォローした。それを聞いて一人の警察官が直ぐに取調室から飛び出して行った。賢は原が帰還した時の状態をありのままに報告した。警察官は、腑に落ちないという顔をしていたが、後から来た男性が言った。

「内観さん、あなたが帰還したときと同じようなパターンですね。我々にはまだその実体が把握できていませんが……」

「はい、このようなことは、心霊現象と同じように受け止められる危険性がありますが、そういう類の現象ではありません。人の意識の作用に関することです。量子レベルで起きる現象がその集合体の人間の身体でも起きるといことなんです」

ふたりは1時間ほど質問を受けた。連絡先を聞かれたが、原が東京に移り住むことは話さなかった。原は元の会社とアパートの住所を伝え、暫くは旅館に宿泊するつもりだと言った。賢はスマホの電話番号と東京の住所を自分の連絡先として伝えた。ふたりは警察を出るとそのまま原の会社に行った。原は何の臆面もなく失踪当時の事務所に入って行った。賢は面会室で待った。30分ほど待つて、原は会社の同僚達に見送られるようにして面会室に姿を現した。手には紙袋を持っている。見送りに出て来た同僚達はまだ腑に落ちないといった顔をしていたが、賢に会うと皆頭を下げた。賢も丁寧に頭を下げた。ふたりは見送る仲間の視線を背に浴びながら会社を出た。

「原さん、会社はどういう扱いになっていましたか？」

「死亡退職扱いになっていました。規定ではそうなっていますから当然です。それでも僕の個人的な品物は保管してくれてありました。中に印鑑もありますから、直ぐに市役所に行って転出届けを出すことができます」

二人はその足で市役所に向かった。原は自分の住所変更の手続きを行った。幸い、市役所の住民登録係の男性は原に対して特別な意識は持っていないかった。住所変更は事務的に処理された。転出先の世帯主を賢にす

ることで万事うまくいった。それから原智明は以前のアパートの大家に電話を掛けた。大家はこの次第を飲み込めないようだったが、契約は所長名で破棄されていて、原の所有物も全て所長が引き受けたと説明した。賢はスマホを見た。既に2時半を過ぎている。ふたりとも途端に空腹を覚えてきた。ふたりは原の案内で、近くのファミリーレストランに入った。昼食の時間帯を過ぎていたが、定食を頼んでみた。30歳前後と思われるウエイトレスがふたりの顔を覗き見ながら特別に用意してくれると言った。

「だから、薩摩の人は好きだ」

原が思わず口にした。ふたりは豚骨と薩摩揚げの定食をあつという間に平らげた。原が言った。

「賢さん、これから例の場所に案内します。実はさっき会社に寄った時、以前使っていたPCの情報を絶対解読できない方法でロックしてきました。フォーマットして消す時間がありませんでしたから、簡単な処理を施しました。その他のぼくに関係ある危ない情報は全て所長が隠してしまっただけです。多分あの場所意外に考えられませんが」

「原さん、PCには危険な情報ばかりじゃなく、いろいろな重要なデータが入っていたんじゃないですか？」

「いろいろな計算式や、データを保存してありましたが、セキュリティロックを掛けてありましたから誰もアクセスできなかったと思います。それに、今、更に絶対解読不可能なロックを掛けてきましたからもう大丈夫です。誰かが物理フォーマットをし直せば完全に消えてしまいます。あの情報は全部僕の頭の中にありますし、いろいろなプロセスも再構築出来ます」

賢はそれを聞いて再び驚いた。この人は一体どういう脳の構造をしているのだろうと思った。多分、物理的な脳以外の思考と記憶のチャンネルを有しているに違いなかった。

「所長はどこに資料を隠したのでしょうか？」

「垂水ですよ」

「えっ！それじゃあなたは失踪する直前、その情報のことで出掛けたの

ですか？」

「ええ、それもあります、本当は少し実験的なことをしたかったんです。でも、それは阻まれましたが」

「阻まれた？」

「ええ、僕が失踪したのは、僕をそこに行かせない為の何らかの意志が働いたとしか考えられません。ムクウさんの意志だったのでしょうか。空に開いた大きな穴に吸い込まれてゆくような感じで、身体が吸い上げられましたから。もっとも、それは物理的な高さの意味ではなくて、意識的な高さですが」

「その意志を示した存在から、何らかのメッセージは受け取らなかったんですか？」

「意識を目覚めさせていましたが、今はまだその時期ではないという感覚を強く抱きました。それがメッセージかどうかは分かりませんが」

「原さん、一体何の実験をしようとしたのですか？」

「創造の実験です」

「創造と言うと、CREATION（創造）の方ですか？」

「ええ、もっとも語呂合わせじゃないけど、IMAGING（想像）の方も含まれます。ある計算式に基づいて、イメージし、計算式の通りの処理をすると、自分の望むものを作り上げることができることが分かったんです。だから、実際にやってみようとしたのです。しかし危険が伴いますからこれは絶対に口外できないんです。あなた以外にはね」

「所長さんもこのことを知っていましたか？」

「いいえ、あの時は所長に会っていませんから」

雨は上がっていた。ふたりはファミリーレストランを出て一旦鹿児島港に行きフェリーで垂水に向かった。フェリーに乗るとふたりは直ぐにデッキに出た。

「垂水には何年か前に竜巻があったんです。その時、所長の実家 — 実は所長の実家は垂水にあったんです。今はご両親が亡くなってしまって、奥さんにも先立たれ所長は実家にはあまり戻らなくなって、鹿児島市内のアパートを生活の拠点にしてしまったんです。そしてそこを研究会の

事務所にしてしまったんです。僕も所長の実家には何度か伺いました。

— その実家の庭を竜巻が掠めて通ったんですが、その後で僕はお見舞いに所長の実家を訪れたのです。庭の散乱した瓦礫や木片なんかを片付けたのですが、竜巻で抉^{えぐ}られた土地の岩陰に大きな甕棺の口の部分が顕れたんです。甕棺だったら逆さに埋めるはずだなどと話しながら所長と僕でその甕の周りを掘^{かめ}ってそれを取り出してみました。ところがそれは棺ではなくて、保管用の瓶^すだったんです。中から麻を漉^{かめ}いて作ったと見られる紙が出てきましたが、表面に何かを塗^ぬってあるようで、保存状態は良好でした。その紙にはいろいろな図形が書かれていました。易の卦のようないろいろな古代の数字が列記されている紙もありました。文字は何も書かれていませんでした。数字と一緒に○や三角、四角なんかの記号を書いたものもありました。全部で30枚の30センチメートル四方ほどの紙と瓶の底の方に何に使われたか分からない、鉄や、石の道具が幾つか入れられていました。僕と所長は30枚の紙に書かれていた内容を全て模写し、中に入れられていた道具のようなものをスケッチしました。そして、その瓶に蓋をして、元の通り埋めてしまいました。考古学者に渡すと、「何々遺跡」ということになって、秘匿されてきた内容が意味を失うような気がしたのです。それで、そこを再び封印し、内容は後で研究してみようということになりました。所長と会った時はいつもその話になりました。どうしても意味が分からなかったのです。1年以上検討をしていたのですが、次第に記号の意味している内容が、ある数式を導く為の演算子だということが分かってきたのです。記号は今の数学で用いる記号に意味が合致するものが多くありました。数字は演算結果を表しているようでした。僕はよく所長に頼んで誰もいない実家の部屋で研究をさせてもらいました。所長は喜んで僕の申し出を受け入れてくれました。ぼくは失踪する直前にあの古い紙に書かれていた情報の意味が、さっき言った創造に関係するものだということ突き止めたのです。凄く興奮しました。その数式があまりにも美しかったからです。居ても立ってもいられずに会社を抜け出したのです。直ぐに確かめてみたくて・・・でも途中で失踪してしまいました」

「そんなことがあったんですか。そうすると、所長の実家のどこかにあなたの資料が隠されている可能性があるということでしょうか？」

「ええ、僕は、所長が僕の資料の核心部分をあの瓶の中に隠したんじゃないかと思います」

その時、原智明の視線が鋭くなって、賢に目配せするようにほんの少し顔を右に動かした。

賢は何気ない様子を装って言った。

「また雨がきますかね」

「いや、この風の方向と、強さ、気温、湿度から見ると雨はこのまま上がるでしょう」

原が応えたのに頷きながら、賢は自然態を装って甲板の方に目を移した。2人の男がこちらを監視しているのが分かった。ふたりは船室に戻った。原が小声で言った。

「今日は、あそこは止めましょう。いつでも行けますし、僕の頭の中に全部入っていますから」

「そうですね。垂水から一気に空港に向かった方が良さそうだ」

それからふたりはほとんど会話を交えなかった。フェリーを降りるとふたりはタクシー乗り場に進んだ。タクシーを捕まえると直ぐに飛び乗った。幸いタクシーは1台しか待機していなかった。後ろを振り返ると先ほどの男達が右往左往しているのが分かった。明らかに後続タクシーを探しているようだった。

「所長はどうしたんですかね。それにしても、彼らはどうして僕達のこと分かったんでしょうかね」

「警察か、会社に行った時に気付かれたんでしょう。直ぐに警察に電話しましょう」

賢はスマホの電話で警察に連絡を入れた。所長を誘拐した犯人とおぼしき男達に追跡^{つけ}られたことと、今垂水埠頭に彼らがいることを告げた。警察は直ぐに手配すると言った。電話を切って暫くすると、賢は心臓に激しい衝撃を覚えた。衝撃は1回だけだったが、その後胸が締め付けられる様な感覚を覚えた。

「どうしました、賢さん顔が真っ青ですよ。どこか気分が悪いのでは」

「はい、一寸胸が苦しくなりました。でも、収まりました」

「心臓が悪いのですか？」

「いいえ、何かの衝動をキャッチしたようです」

賢は直感的に麻子を思い浮かべた。透視を試みたが、精神が安定状態にない為か、どうしてもうまくいかない。早く帰ろうと思った。空港に着くと、賢は原と協力して直ぐにフライト変更の可能性を調べた。東京へは1時間後の便を確保できた。しかし、大阪への便は満席で、依然としてキャンセル待ちの状態のままだった。それも、まだ賢の前に3人が待っていた。賢はクレジットカードでキャッシングを行ってから、直ぐに祐子に電話を入れた。祐子の声は明るくなっていた。原の到着時刻の変更を快く引き受けた。祐子は電話を切る前に、「早く帰って来て」と言った。ふたりはスナックスタンドで軽くサンドイッチを食べた。原のフライトは6時10分過ぎだった。賢は原に5万円を渡してからゲートの外で見送った。原は姿が見えなくなる前に振り返って賢に手を振った。賢はもう一度電光掲示板でフライトを確認してみた。大阪、神戸行き以外のフライトで、今日中に和歌山に戻れるのは名古屋行きしか頭に浮かばなかった。賢はJALの予約カウンターに行った。幸い、神戸行きの便にキャンセルが出たとのことだった。大阪は3人が待っていたが、神戸はキャンセル待ちがいなかった。賢は直ぐにチケットを購入し、その足でチェックインを済ませた。搭乗までにまだ1時間以上の時間があった。賢は近くにある待合い用の椅子に腰掛けて、意識を麻子に向け瞑想状態に入った。暫く瞑目すると漸く麻子の姿が現れた。苦しみもがいている姿だった。賢は苦しみの原因を見た。それは頭部の衝撃的な苦痛から来るものだった。少しして、麻子の顔から苦しみが消えた。そして、賢に向けて強い愛情が流れて来るのを感じた。麻子から流れて来る意識が非常に軟らかく、軽い。賢は麻子の身に何か起きたのだと思った。麻子は微笑みながら賢に手を振って消えた。賢は瞑想状態を解いた。今の情景は明らかに、今までの麻子とは異なる意識の状態を示していた。やがて搭乗のアナウンスがあった。飛行機が神戸空港に着いたのは9時半

過ぎだった。空港を出ると、直ぐにポートライナーに乗った。賢は心穏やかでなかった。しかし愛子にも連絡の取りようがない。三ノ宮で乗り換えて大阪に着いたとき、賢はスマホに着信があったことを知った。祐子からだ。賢は直ぐに祐子に電話を入れた。祐子は無事原智明と出会えたと言った。賢は又暫く緊急事態があるので、電話の電源を切ることを伝えた。今度は祐子も落ち着いて了承した。天王寺で乗り換えた後、1時間ほどして漸く和歌山に着いた時は既に12時を廻っていた。もう和歌山線の最終は出てしまっていた。賢は直ぐにタクシーに乗った。アパートに着いた時には既に1時過ぎだった。アパートの前にパトカーが2台停まっていて、ヘッドライトを付けたままになっていた。辺りは騒然としていて、何人かの人たちが何か囁き合っている。賢は湧き上がってくる不安に襲われた。タクシーから跳び降りると、側に立っている男性に近付いて訪ねた。

「何かあったんですか？」

「人が殺されたんだよ」

「誰が殺されたんですか？」

「このアパートに済んでいる生島麻子という女の人だ」

賢はその言葉に激しい衝撃を受けた。心臓の鼓動が激しくなった。頭から血が引いてゆくのを感じたが、意識的にそれを抑えて急いで階段を駆け上がった。部屋の前にはロープが張ってあった。賢はそのロープを潜ろうとして、近くに立っている警察官に止められた。

「わたしはここに同居している者です。中に入れてください」

警察官は黙って賢の手を離した。部屋の中に駆け入ると、大勢の人間が辺りを調べ廻っている。賢は流し台の前の床の上に俯せに倒れている麻子の姿に気付いた。後頭部から血が流れていて、床にも血が流れ出していた。賢は警察官の制止を振り解いて麻子の身体に触れた。賢の目から涙が溢れ出した。

「麻子どうしたんだ！何があったんだ!？」

「既に亡くなっています」

警察官が言った。賢は中空に浮いている麻子の姿に気付いた。賢は心の

中で麻子に話しかけた。

「何があったんだ！どうしたというんだ！」

「あなた、ごめんなさい。旅行楽しみにしていたのに。わたし、死んでしまったみたい。でも生きているわ。なんだか妙な感覚よ。身体がとっても軽いわ。どんな風になっても意識がある限りわたしはあなたのことを愛し続けるわ」

「どうしたんだ！いったい誰にやられたんだ!？」

「もう、過ぎたことはいいの。わたしはあなたに逢えただけで十分よ。このあなたを愛する心だけを持って去ってゆくわ。愛子のことお願いね。あの子を守ってあげてね」

「もしもし、だいじょうぶですか？」

警察官に身体を揺すられて、賢は意識をアパートの部屋に戻した。

「娘が居たはずです！愛子が居たはずです！どなたか愛子を知りませんか!? 中学生の女の子です！」

一人の警察官が応えた。

「娘さんは階段の下に倒れていたのを通り掛かった人に発見されたのです。その人から119番に通報があって、救急車と一緒に我々が急遽駆けつけたら、そこで初めて殺人事件があったことが判明したのです。娘さんは意識を失っていましたので、直ぐに病院に運ばせました。発見からまだ1時間ほどしか経っていません。それに、容疑者も逮捕しました。血の付いたハンマーを手にぶら下げて放心したように道路を歩いていたところを、ここに急行する警官に発見され、すぐに取り押さえられました。容疑者は酩酊していて、意識が無いような状態でした。お手数ですが詳細を確認したいので、後で署まで同行頂けますか？」

「はい、分かりました。しかしその前に病院に行って愛子に会いたいのですが」

「分かりました。我々が同行します」

賢はパトカーで近くの総合病院に連れて行かれた。個室の救急病棟に愛子は運ばれていた。警察官は一旦署に戻ると言って帰って行った。賢は翌朝出頭すると伝えた。病室に入る前に当直の看護婦から、急遽レント

ゲン撮影をしたが身体に異常は無かったとの説明を受けた。外傷も全く無いとのことだった。愛子は衣類を入院服に着替えさせられていて、いつも身に付けている茶色のチェックのシャツと紺のスカートと靴下が畳んで椅子の上に置かれていた。賢はベッドの横に置いてある別の椅子に腰掛けて愛子を覗き込んだ。愛子はまだ意識を失ったままだった。賢は愛子の右手を取って瞑目した。そして心の中で愛子に呼びかけた。

「愛子、しっかりしなさい。意識をこの世界に戻しなさい。僕が附いているから何も恐れなくてもいい。早く意識を戻しなさい」

愛子が賢の右手を握り返した。賢は声を出して愛子に話し掛けた。

「愛子、しっかりしなさい。今は、お母さんが旅立つのを見送らなくてはならない。意識を戻しなさい」

愛子の身体が次第に震え出した。そして、その震えは次第に激しくなってきた。賢は愛子の身体を起こしてその手を握り、目を見つめて言った。

「愛子、僕と一緒に居るから心配しなくていい。怖かったろう。もう大丈夫だよ。今は何も考えるな」

賢は優しく愛子の肩に手を廻して抱き寄せた。愛子の震えは次第に収まってきたが、目から急に涙が溢れ出した。愛子は嗚咽を上げた。賢は愛子の頭を抱え込み自分の胸に抱き締めた。愛子は身体を震わせて激しく慟哭した。賢は黙って暫くの間愛子の身体を抱き寄せていた。その慟哭の音が聞こえたのか、ドアをノックする音がして看護婦が入って来た。

「気が付いたのですね。患者さんは大丈夫ですか？」

「はい、身体は大丈夫のようです。済みません、衝撃と悲しみの渦の中から抜け出すまで、暫くこのままにしてあげて頂けますか？」

「はい、分かりました。何かあったらそのボタンを押してください」

看護婦は愛子の身体に異常が無いことを知っていたので、直ぐに出て行った。それから暫くの間愛子は泣き続けた。30分ほどして漸く愛子の慟哭が収まった。愛子は賢の目をじっと見つめて、賢の右手を握り締めた。賢は左手でズボンのポケットからハンカチを取り出し、愛子の涙を拭ってあげながら言った。

「愛子、今日はこのまま安心して眠りなさい。ぼくがずっとここに附い

て居るから」

愛子は再び目に一杯涙を溜めた。そして頷いた。賢は愛子をそっとベッドに横たえて、毛布を掛けてやった。愛子は暫くしゃくり上げたり、寝返りを打ったりしていたが、やがて眠りに落ちた。賢は意識を保ちながら、朝まで椅子の上で休息を取った。意識を病室に戻すと、賢は愛子の状態を確認した。看護婦がやって来て一通りの簡単な検査を行った。検査の後、賢は愛子に言葉を掛けた。

「眠れたか？」

「はい、賢パパ・・・お母さんはどうなったの？・・・ねえ、賢パパ」
昨夜、麻子が亡くなったことを伝えていたが覚えていないようだった。

「残念ながら、お母さんは亡くなってしまった。今日はこれから警察に行ってお母さんに会うんだ」

愛子は身体を震わせて泣いた。もう涙が涸れてしまっていた。

「・・・わたしも行く」

「愛子はまだ先生に見て頂かなくてはならない。少ししたら退院出来るから、僕が迎えに来るまで待っていなさい」

「うん、分かったわ。わたし、すごく怖かった。夕食が終わった時、お父さんが急に入って来たの。そして、何か大きな声でお母さんに怒鳴ってから、手に持っていたハンマーを振り上げてお母さんをぶったのよ。お母さん、悲鳴も上げずに倒れてしまったわ。お父さんはそのまま外に出て行ったの。わたしは怖くてがたがた震えていたけど、這いずってお母さんの所に行って、お母さんを揺り動かしたの。お母さんはぐったりしていたので、身体が震えて立ち上がれなかった。気を強く持つようにして、何とか立ち上がって、早く救急車を呼ぼうと思って階段を駆け下りたんだけど、途中で意識が無くなってしまったの。気が付いたら、ここに居て賢パパが傍に居て・・・」

看護婦が愛子は警察の確認を待ってから退院することになると賢に説明した。賢は少し心配だったが、愛子を病院に残して警察署に出向いた。賢は先ず事情聴取を受け、それから死体安置所で麻子の確認を行った。既に死体の検証は終わっており、警察官から打撲による頭蓋骨陥没と脳

挫傷による即死だと告げられた。頭部に包帯を巻かれてはいたが麻子の顔は穏やかで、微笑みを浮かべているようにも見えた。死の瞬間の意識の状態が顔に表れているのだと賢は思った。警察は亡骸の引き取りはいつでもいいと言った。賢は麻子の死体は既に麻子の魂とは関係のない存在になっていることは分かっていたが、警察に聞いて直ぐに葬儀屋に連絡をした。事情を話すと葬儀屋は遺体をアパートではなく葬儀場に移すことを賢に勧めた。賢は了承した。死体の移動から葬儀まで全て、葬儀屋が手順を踏んで行ってくれることになった。一旦警察を出ると、賢は再び病院に戻った。既に愛子は着替えを済ませていて、賢を待っていた。愛子は警察官が来て確認をして帰ったと言った。賢は治療費を支払ってから愛子を労るようにして病院を出た。ふたりが病院を出るとカメラマンのフラッシュ攻勢に出合った。マイクを持った3、4人の記者がいろいろ質問してきた。賢はただ、

「今は、そっとしておいてください」

とだけ応えた。何を聞かれても同じ答えを返した。ふたりはカメラマンから逃げるようにして斎場に向かった。賢は愛子の肩に手を回して歩いた。愛子はまだ放心状態で足取りもしっかりしていなかった。今は心の奥に隠れてしまったが、いずれ麻子が殺された時の衝撃がトラウマとなって愛子の意識に頭れてくることを賢は知っていた。心の優しい愛子の衝撃がどれほどのものか容易に推し量ることはできないと思った。賢はタクシーを呼び止め、愛子を促して乗った。記者達は急いで車の所に戻って行った。追跡するつもりのようだ。タクシーが動き始めると愛子が小さな声でぼつりと言った。

「賢パパ、ずっとわたしの側に居てね」

「愛子心配するな。僕は一生お前の側に居るよ」

それからふたりは一言も話さなくなった。斎場に着いた時には既に麻子の遺体は棺に納められていて、一番小さな部屋に安置されていた。愛子は麻子の微笑んでいるような顔を見ると、涙がこみ上げてきて黙って賢の胸に顔を埋めた。賢は優しく愛子を抱き締めた。愛子の悲しみが押し寄せる波のように伝わってきて、賢の胸を突き破り涙となって迸り出た。

愛子が賢の胸から顔を上げると、まるでタイミングを測ったように係員が出て来て賢にいろいろ質問した。先ず宗派を聞かれた時、賢は愛子に確認もせずに「日本神道です」と応えた。係員は淡々と、質問を続けた。埋葬場所を聞かれた時は、「遺骨は自分たちが持ち帰ります」と応えた。係員は「火葬でいいか」と聞いた。賢は頷いた。係員の判断で今日通夜を行い、明日の午前10時に火葬という段取りとなった。通夜も葬儀もこの辺りの方式で行うこととなった。香典返しは茶にすることとした。愛子は学校に連絡した。賢は愛子に聞いて麻子の親戚に連絡を入れた。両親は既に亡くなっていた。麻子が幼少の頃、両親は母親の実家に住んでいたが、今は長男の家族がそこに住んでいた。麻子は長女で、姉弟はその長男だけだった。麻子の父親の実家は長崎だった。連絡を入れると「葬儀には出席できない」とけんもほろろに言われた。愛子の父の実家にも連絡を入れた。しかし、電話口に出た女性は麻子の名前を聞くといきなり電話を切った。一通りの連絡を済ますと賢は愛子の手を取って再び麻子の棺の前に戻った。

「愛子、このお母さんの身体は、もうお母さんじゃないんだよ。お母さんはこの体から出て今は別空間に居るんだ。まだ次に生きる場所には行ってなくてその途中段階にいるんだ。今日は、お母さんと3人で過ごそう。この身体のことじゃないよ。意識のことだ」

愛子は黙って頷いた。賢は愛子に「お腹が空かないか」と訪ねた。愛子は「病院で朝食を頂いた」と応えた。しかし、賢は愛子を連れて外に出た。時々愛子は思い出したように目を潤ませている。ふたりは近くにある寿司屋に寄った。その寿司屋はどうやら齋場と提携しているようだった。賢が上寿司を2人前注文すると愛子は涙を浮かべた。その涙を見て店主が言った。

「どなたかご不幸ですか？」

「ええ、この子の母親が亡くなりました」

「それは大変でしたね。お悔やみ申し上げます。こちらの齋場でご葬儀ですか？」

「ええ」

店主はそれ以上話し掛けてこなかった。直ぐに寿司が運ばれてきた。

「愛子、お前の好物だよ。食べなさい。元気を出さなくちゃ。今晚一晩お母さんと過ごすんだよ。もう暫くは会えなくなる。多分僕たちが死ぬまではね」

賢は先ほどから、麻子の視線を意識していた。賢達ふたりに暖かい視線を投げ掛けてきていた。賢がカウンターの上方を見ると、そこに麻子が微笑み掛けて浮かんでいた。

「愛子、ほら、お母さんがそこにいるよ」

店主の顔面から血が引いた。

「お客さん、脅かさないでくださいよ」

「あっ！本当だ、おかあさん！笑っているわ」

店の照明が点滅した。店主は逃げるように奥に引っ込んでしまった。賢は心で話し掛けた。

「麻子、僕と愛子は今寿司屋さんに居る。今晚、一緒に過ごそう。君が向こうの世界に行ってしまう前に、一晩一緒に居よう」

麻子の声が心の奥に響いてきた。

「あなたにも、この感覚を教えてあげたい。とても軽いのよ。今まで、自分だと思っていた、身体や思いが自分のものではなかったことが分かったわ。あなたと愛子に意識が向くと、自分の全体が暖かく膨れてくるような感覚がするの。この感覚はそちらの世界に居た時と同じ感覚ね」

「まだ、君は死後に行く世界には至っていないんだ。もう少しすると、自分の意識の状態に合った世界に移ることになるよ。君の心はきれいだから、きっと美しい世界に住むことになるよ。そこに行く前に、暫くはこちらの世界から移行するための準備をすることになっていると思う。

詳しくは今夜話すよ」

愛子が意識で話に加わってきた。

「おかあさん、怪我した頭はもう大丈夫？痛くないの？」

「初めは痛かったわ。でも、もしかしたら痛くないんじゃないかと思ったの。そしたら痛くなくなったわ。だって、以前の怪我をした身体は無いんだもの。今の身体はコピーみたいなものね。変な感覚！あなた、し

っかりしなくては駄目よ。これからはおとうさんとふたりで力を合わせて生きてゆくよ。わたしが天国で応援しているから。いいわね！おとうさんにわたしの分まで可愛がってもらおうよ」

「おかあさん、分かったわ」

奥で大きな咳払いの音がした。それと同時に麻子の姿は消えた。ふたりは意識を寿司屋に戻して、目の前の寿司を黙々と食べ始めた。

「お客さん、き、来たんですか？」

「ええ、今までそこにいました。そのカウンターの所に」

「うっ、嘘でしょう！わっしにゃ見えませんでしたぜ」

「嘘ですよ。心配しないでください」

「脅かしっこなしですぜ」

ふたりは顔を見合わせて吹き出してしまった。賢は愛子が笑ったので内心ホッとした。

「賢パパ、亡くなった人がいつも心の中に生きているって本当のことなのね」

「そうだよ、愛子。姿は無くなっても、生命は永遠に生き続けるんだよ。愛子、お前も失踪したとき経験しているんだ。その経験を覚えていないけどね。それは完全に意識的に生きていないからなんだよ。意識を生起させて生きると、自分がどこに居ても、どんな形になっても、自己の認識ができるんだ。お前はこれからいつも僕と一緒に居ることになるから、いろいろ教えてあげるよ」

「うん」

愛子は黙々と寿司を食べた。マグロの中トロを口に入れた時、麻子が口に入れたときの喜びに満ちた顔を思い出した。涙が愛子の頬を伝わって流れた。賢は箸で自分のイクラとウニを摘むと愛子の寿司桶に入れた。愛子は涙顔を賢に向けて、自分のアナゴとエビを賢の寿司桶に入れ返した。賢は愛子を見て微笑んだ。愛子は眼鏡が涙で曇った顔に微笑を浮かべた。

「わたし、アナゴはあまり好きじゃないの。だって、怖い顔をしているでしょう」

「確かに、あれはあまり可愛くないな。口を開けていると、噛み付かれ
そうな気がする」

「お客さん、そんなことを言うと、アナゴに怨まれますよ」

横で話を聞いていた店主が言った。ふたりは店主に向かってにっこり笑
顔を作った。漸く愛子が元気を取り戻してきた。

ふたりが斎場に戻ると、入り口には既に受付の台が置かれていた。その
上には会葬者の記帳用冊子が置かれていて、受付のテーブルの下には香
典返しの茶の袋が段ボール箱に1箱用意されている。一般的なやり方を
頼んだ為、定型のパターンで準備したのだと賢は思った。夕方5時半を
過ぎると、中学生や学校の先生達がやって来た。手に手に香典袋を持っ
ている。賢は一人一人に礼を言い、記帳を頼み、香典返しを返礼に渡し
ていった。通夜には愛子の学校の関係者と、以前住んでいた近所の人た
ちが訪れたが、親類は誰一人来なかった。通夜式は斎場が依頼したと思
われる神主と司会者の案内で行われた。仏式で普通に行われる読経に代
わって祝詞が謡われた。参列者は係りの者に渡された玉ぐしを霊前に手
向けた。愛子の同級生には親しい友人はいないようで、通夜式が終わ
ると、一言二言声を掛けて引き上げて行った。愛子の失踪前に通っていた
学校には連絡を入れなかった為、参列者は無かった。参列者は全員で3
0名ほどだった為、とてもひっそりとした通夜式だった。通夜式が終
るとふたりは控え室に移った。斎場の係りの者が棺を控え室の奥の祭壇
に移した。ふたりはそこで一晚過ごすことになった。部屋には布団が2
セット用意された。賢はテーブルに用意されている茶道具で茶を入れた。

「親戚の人は来なかったね」

「誰も来ないなんて、おかあさんが可哀そう」

「お母さんは、そんなに悲しそうじゃなかっただろう。おまえと僕がい
ればお母さんはそれだけで十分幸せなんだよ。それに、親戚の人は明日
の告別式に来るかもしれないし」

「おかあさん、お寿司屋さんで消えてしまってどこへ行っちゃったのか
しら」

「一緒にお母さんを思って瞑想してみよう。お母さんの方に行ってはだ

めだよ。お母さんと呼ぶつもりになるんだ。きつとここに居るよ」